

DEW
stream 2025

Planning, Design, and Consulting
SHIMIZU CORPORATION

vol.84

DEW vol.84

stream 2025

「考える・そして問いかける」

今年度のDEW冊子では、作品を通じて設計者とDEW委員が対話を重ねることを大切にし、設計者のチャレンジや込めた想いを、より深く掘り下げてお伝えすることを目指しました。近作プロジェクトから選定した作品については、DEW委員が実際に現地へ足を運び取材を行いました。設計者との対話を通して、その土地ならではの息吹や、創造の裏側に秘められた深い洞察をもたらしてくれました。この活動の様子は「Dialogue」と記載のあるページでご紹介しています。ご協力いただいたお客様をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

- 02 - 05 大熊町大野駅西交流エリア CREVAおおくま・クマSUNテラス
 - 06 - 09 両国M-1 Garden(大坪電気本社ビル)
 - 10 - 13 清水建設 名古屋新支店
 - 14 - 15 LaLa arena TOKYO-BAY
 - 16 - 19 2025 大阪・関西万博 大屋根リング
 - 20 - 23 飯田グループ×大阪公立大学共同出展館
 - 24 - 27 シックスセンス京都
 - 28 - 31 エミテラス所沢
 - 32 - 35 BLUE FRONT SHIBAURA TOWER S
 - 36 - 39 日本道路株式会社 土浦テクノBASE
 - 40 - 43 BIZIA KOKURA
 - 44 - 45 元町ウェルネスパーク
 - 46 - 47 厚木市文化会館改修事業
 - 48 - 51 Seed1931 (旧十八銀行諫早支店有効活用)
 - 52 - 53 日東電工尾道事業所 増設新事務所棟
 - 54 - 57 HARUMI WAVE GARDEN
 - 58 - 59 ダイキンエアタワー
 - 60 - 61 みなとみらい学園歯科クリニック
 - 62 - 63 新宿サブナード
 - 64 - 65 ダイナミック・ライブ・フロア®
 - 66 - 67 未来につながる環境アイデアビッチ
 - 68 - 71 留学体験記
-
- 72 - 73 DEW活動 多様な学び・成長・挑戦の場
 - 74 - 75 作品データ
 - 76 紙のこと、資源のこと、地球のこと

stream DEW：潮流を成す“雫”の活動

「stream DEW」の活動は、設計部ニュースとして1979年に創刊されながらも休刊となっていた冊子「STREAM」の復刊から始まりました。設計本部内の若手を中心に編集委員を任命し、2007年11月に「stream DEW67」を発行、以来編集委員を交代しながら毎年発行しています。「stream DEW」には個人の創造性の発露(雫=DEW)が従業員相互の啓発・情報共有の源であり、それが大きな流れ(潮流=stream)となるという意味を込めています。

町の未来をつなぐ、
にぎわいと交流の新しい拠点

大熊町大野駅西交流エリア CREVAおおくま・クマSUNテラス

CREVA OKUMA・KUMA SUN TERRACE



暮らす人や働く人が交流できる
居心地が良い町のリビング
意匠設計 南野 友子



大熊町らしさを追求し、
素材感や色彩を丁寧に検討
意匠設計 奥 浩



耐火建築物において木を表して
使用した斜格子構造を実現
構造設計 安藤 佳奈



外部と一体的な利用が可能なCREVAホール



交流や滞在のための中庭



ラウンジ・外部テラスまで斜格子木架構が連続する



町の人も訪れる人も自然と集うクマSUNテラス

産業と暮らしが交わる、CREVAおおくまの挑戦

震災や原発事故による全町避難を経て、JR大野駅前に新たな“集いの場”が生まれました。CREVAおおくまは、復興や新産業の創出のためのオフィスと交流機能の複合施設です。コワーキングスペースやラウンジ、テラスなど、働く人も町の人も自由に使える共用スペースが広がり、木の温もりを感じる空間が人と人をつなぎます。CREVAホールから広場までを一体で使える空間や、屋上から町や広場を一望できる眺めが、この場所ならではの魅力です。

駅前に生まれた、 みんなの“集いの場” クマSUNテラス

クマSUNテラスは、駅前から続く広場と商業施設で構成されています。分棟と雁行配置によって、かつての町並みのスケール感を大切にしながら、建物の間やずれたスペースに多彩な居場所をつくっています。日常の買い物や食事、イベント、子どもたちの遊び場として、町の人も訪れる人も自然と集い、思い思いに過ごせる場所です。

ゼロカーボンのまちづくりへ、地域とともに歩む

両施設は、太陽光発電や地中熱利用など、再生可能エネルギーを積極的に活用し、大熊町が宣言した「2040年ゼロカーボン」への挑戦を後押ししています。復興のシンボルとして、町の人々や企業、子どもたちが集い、未来へとつながる新しい日常を育む拠点となることを願っています。

外部と一体的な利用が可能な大空間

DEW: CREVA ホールの設計のこだわりを教えてください。

南野: 南側の大型引戸は全面開放が可能で、外部の縁側テラスや広場まで一体的に利用することができます。広場と間の道路は当初はイベント時の占有などによる一時的な一体利用を想定していたのですが、町議会からも歩行者優先のエリアにしたいという意見が上がり、歩行者専用道路に位置付けられたことで、日常的に商業エリアまでもを一体的な空間として利用できるようになりました。

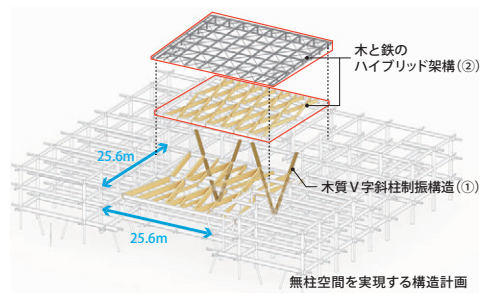
DEW: 約25m×25mの大空間で構造設計として挑戦したことを教えてください。



CREVAホールの思想を語る南野さん

安藤: CREVAホールの上部には屋上テラスがあり荷重もスパンも大きいのですが、意匠的な面から梁せいに制限がありました。検討の結果、細柱を配置し3階と2階両方の梁で荷重を負担するフィーレンディール架構とすることで大空間を実現しました。この細柱の検討も意匠設計と共同で行い、直径205mmの細柱をサッシに合わせて3.2mピッチで配置することで、2階コワーキングスペースからの視認性に配慮しました。

V字の木質ハイブリッド柱にはH鋼をカラマツで被覆した大臣認定品を用いています。一般的に、ラーメン構造の中にV字斜柱を配置すると地震力を大きく負担しますが、柱脚部にすべり機構を設けた上で鋼材ダンパーを設置することで、地震力を制御し部材の破壊を防止するとともに、地震時のエネルギーを吸収する機能を持たせています。また、足元に



ダンパーを設けることで大地震後の交換等のメンテナンス性を向上させています。(①)

人々が集まり交流する場

DEW: 広い屋上テラスも特徴的ですね。

南野: テラスの軒天部分について、広場に面した中央部と外周部で形状を変えています。人の集まる中



央部の角は、Rの形状に杉板を階段のように段々貼にしています。外周に向かうにつれて、段々から斜めの平面へと徐々に断面が変化していく形にしました。

DEW: この軒天の形状はどのように実現したのでしょうか。

南野: 木で円錐のような形状を実現するために、曲げ加工や、かたまりから削り出すなど様々な選択肢の中から、階段状に貼るという方針になりました。陰影も生まれて、木ならではの細やかな外装が実現できたと思います。

奥: 階段にも交流を生み出すべく仕掛けを施しています。足元にステージを設けて人が座ったり溜まったりできる空間を創出し、上層階では階段の手すりをそのまま延長してカウンターまでつながるようにしています。こうしたコミュニケーションを生む仕掛けをデザインしました。

安藤: 通常、耐火建築物で木を構造体として利用する際には断面の大きな耐火木材を用います。今回は軽快なデザインとするために、屋上テラスに張り出す屋根部分は、木を構造体として利用しつつ、上部に小断面の鉄骨梁、下部に集成材斜格子を用いたハイブリッド架構を採用しました。(②) 木梁と天井の間の空間を大切にしたいという意匠設計のこだわりを実現するため、木梁の接合部に鋼板



を仕込むことで耐力を補強し、同一平面上で交差させ、奥行きのある空間を実現しています。

DEW: 商業施設と広場についてはいかがでしょう。

奥: 商業施設の設計では、震災前の商店街のヒューマンスケールや賑わいを再現するため、建物を分棟とし、敷地の傾斜に沿って回転・雁行配置を採用しました。これにより、敷地のレベル差を自然に解消しつつ、先が見え隠れして先へと行ってみたくなる空間となっています。

また、大野駅周辺の復興事業が今後も進んでいくことを踏まえ、広場は将来の周辺でのプロジェクトとの連携を想定し、柔軟性を持たせた計画としています。各棟の配置や共用デッキ、中庭の抜けなど、町の原

風景や交流の場を継承しつつ、今後の発展と新たな賑わいの創出を期待しています。



(インタビュー: DEW委員 佐鳥、船越、小林、末金、南川)

地域・社員・未来の
電気工事の担い手のため
次なる100年を照らす本社に

両国M-1Garden（大坪電気本社ビル）
RYOGOKU M-1 GARDEN HEAD OFFICE BUILDING OF OEC



こだわりを詰め込んだ
新たな居場所
意匠設計 岡崎 真也



若手チームで
M みんなが1いちばんを実現
意匠設計 江頭 樹



将来を見据えた新技術の採用
施主の今と未来をつなぐ電気設備
電気設計 遠藤 聡人



納まりや仕上げの細部まで工夫
社員の学びにつながる空間を創出
設備設計 小杉 健祐



方杖不要な補剛レス工法を採用し
施工しやすい天井内を実現
構造設計 板原 奎樹



清澄通りから外観を観る テラスで分節した外装デザイン



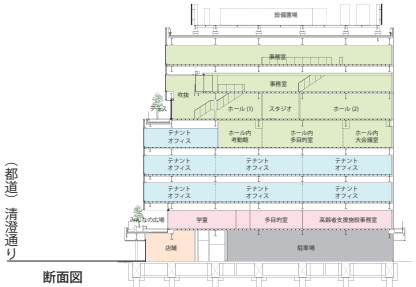
テナント各階には外気に触れリフレッシュできるテラスを設えた



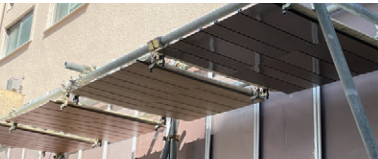
学童・高齢者支援施設をとりまくテラスは市民の憩いの場に



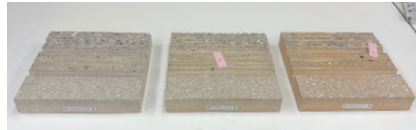
天然木で木々の香るあたたかみのあるオフィスエントランスに



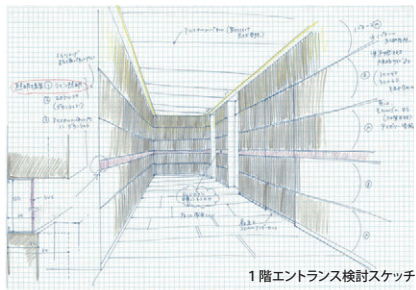
(都通) 清澄通り



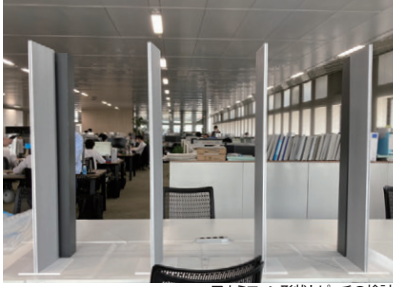
軒天井スバンドレールは複数のモックアップにより見え方を確認



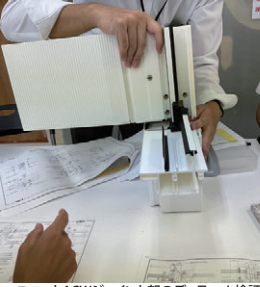
親しみある表情をめざしウォータージェットの強弱をサンプルにより比較



1階エントランス検討スケッチ



アルミフィン形状とピッチの検討



ユニットACWジョイント部のディテール検証



墨田区施設への動線となる大階段 オフィス階外装は西側に日射遮蔽用のフィンを設えたカーテンウォール

**新本社・テナントオフィス・
児童福祉施設等・店舗からなる複合ビル**

大坪電気創業100周年事業としての新本社計画です。複合する機能にあわせて2階・6階に設けたテラスが建物を分節し、都道から段々にセットバックさせることで道路側への圧迫感を減らしつつ、周辺建物のスケールとの調和を図る全体計画としています。

公共性の高い低層部とオフィスCW外装

低層部の賃貸フロアには墨田区の学童・高齢者支援施設が入居するため、視認性の高い交差点側に大階段を設け、2階テラスに直接アクセスできるよう計画しました。低層部の外装は堅牢さと親しみやすさの双方を感じるカラーコンクリートのPCa板を採用。軒天井には反射率の高い素材で周囲の景観を映し込ませるなど、地域とのつながりを表す材料選びにこだわりました。高層部のオフィス階は端正な表情のユニットカーテンウォール外装でまとめ、工事の省人化にも配慮しました。(江頭)

BCPに配慮した「みんなの広場」

「みんなの広場」と名付けた2階のテラスは、日頃は施設への動線・憩いの場として機能しながら、災害時には避難場所として地域に開放され、防災用のコンセントを提供します。高圧キャビネットも2階に設置し、外水氾濫時の水損対策に配慮しました。(江頭・遠藤)



電気工事業の可能性や未来をみせるエントランス

6階新本社のエントランスは、非対称断面のスパンドレルに間接照明を仕込み、人の移動方向によって天井面の明暗の見え方が変化するデザインに。左右には、普段はシャフトの内側に隠される電気設備をシースルー化し、本社の顔として設えています。EPS内には、内部構造が視認できるスケルトン分電盤を

設置。バスダクトやアルミケーブルといった特殊な電材も採用しました。電気工事業の矜持を示す本社のエントランスとしてふさわしい姿を求めて、電気設計と意匠設計が丸一となってデザインした空間です。（江頭・遠藤）

本社全体が電気・建築工事について学ぶ教材

研修エリアは、天井・壁を段階的な仕上として電気・空調・建築工事のプロセスが学べるような設え、ホール等には直天井を採用して設備を意識的に見せる、役員応接室は光幕天井とするなど、様々な照明計画・納まりをちりばめています。一般執務エリアにおいてもグリッド天井・間接照明・ライン照明を組み合わせ、全館DALI制御やサーカディアン照明の採用を含めて、日ごろから教材としてもらえるよう細部までこだわって計画をしました。



トイレは線の光、点の光、面の光をテーマに各階異なる照明計画を採用しています。大坪電気の現場担当者と施工方法や納まりについて詰めて検討し、各階で異なる取合に苦渋しながらも無事に実現しました。（江頭）



若手技術者の教育に資する屋上設備計画

屋上のキュービクル前面には、実機を見て学ぶ研修時に社員が集まる場所として、幅3m以上の空間を確保。また、異なる8種類の耐候性塗装を施し、その経年変化を比較観察できる分電盤、動力盤を設置するなど、今回ならではの実験的取組を数多く行っています。（遠藤・小杉）



「みんなのオフィス」をめざして

外出の多い社員も「帰ってきたい」と思えるような、心地よく働ける居場所かつ電気工事業を誇りに思える空間づくりを心掛けました。また、外とつながるワークプレイスとすることも意識しています。ただ閉じたオフィスになるのではなく、地域とのつながりを大切にしながら、地域・社員・未来の電気工事に携わる方々といった「みんな」に愛される建物となることを願っています。（江頭）



西国国技館の土俵を模した打合せスペースのある本社エントランスフロアから執務室を見上げる

社内外との繋がりを強化する
“Communication HUB”

清水建設 名古屋新支店 SHIMIZU CORPORATION NAGOYA NEW BRANCH

第38回日経ニューオフィス賞 ニューオフィス推進賞



支店全員で考え、
支店全員で創り上げていく
意匠設計 小土井 元規



働き方の異なる各部署の特性を
踏まえたワークプレイスを実現
ワークプレイス設計 小河 麻衣子



DEW
大西 慶太郎

DEW
島田 大偉

意匠設計
小土井 元規

DEW
花房 秀華



他部署の活動に自然に触れる多目的空間



支店の歴史を映し出すエントランスホール



「Reflection」瞑想、超集中の空間



「Library」ひらめきや発見を促す情報拠点

社内外とのオープンエンドな繋がりを目指し、新しい働き方へ挑戦する

設計部の枠を超え「支店全員で考え共創する」ことを大切に、内外勤務者約1,200名に対するアクティビティサーベイやアンケートを実施しました。それにより、社内外の繋がりを強化する支店を目指し「Communication HUB」をコンセプトとしました。執務エリア内に社外へ開放可能な吹抜空間 Communication Field をつくり、社外講演会をはじめ、勉強

会、朝礼、デザインレビュー、ランチの場など、自然と他者の活動を享受できる空間を計画しました。稼働後もDE&Iの視点で誰もが働きやすい職場になるよう、運用の工夫やアンケート調査を行うことで、時代のニーズに合ったオフィスを追求し続けています。
(小土井・小河)

コンセプトに込められた思い

DEW: 支店全体を巻き込んだ新支店づくりに込めた思いをお聞かせください。

小土井: 支店は風通しがよいとよく言われますが、実際旧支店では5フロアに分断され他部署が何をやっているか見えない状況でした。もちろん営業所も同様です。また発信力や外部との関係性も皆無であると思っていました。他者との共創により建設分野の領域を超えていこうとしているシミズにおいて、一番改善しなければならない点だと思い、「オープン

エンド、開放、終端のない状態」を作りたいと、頭の中で考えていました。

そんな中で取ったアンケートで、私だけでなくいろんな部署が他部門との繋がりを求めていることが分かり、驚きと嬉しい気持ちになったのを覚えています。自信をもって、社内外との繋がりを軸に語ってほしいと思いました。

支店設計という難しさ

小土井: 各部署の要望が異なり、我々が目指す新しい働き方、新支店の姿にならないであろう意見もでてきたのが難点でした（例えば、固定席派、ABW反対派などの現状維持を求む意見など…。）

DEW: 異なる社内の声をどのようにしてまとめたのでしょうか。

小土井: まずは新支店のコンセプトや、何故新しい働き方を目指すべきなのかを、きちんと支店従業員全員に理解してもらうことが必要と考え、移転前に複数回説明会を行ったりイントラに配信したりしました。最後は各部署長への対面ヒアリング時に、要望の本質を聞き、実現できるもの、部署共用など

条件付きで実現できるもの、ごめんなさいのものを、納得していただくまで粘り強く説明を行いました。

DEW: 営業所の方も利用する建物だと思いますが、何か工夫したポイントはありますか？

小土井: 名古屋支店は東海四県を管轄する支店で、10の営業所があります。営業所の方も含め、みんなの支店として共有できるよう、吹抜上部の光幕照明には全営業所の方向を示すサインを施しました。



OUR TEAMとしての求心性・象徴性・東海4県の繋がりを創出する光幕



名古屋飯の名前がついた会議室サイン

支店のみんなで考え、みんなで創り上げていく

小土井: 「ワーキンググループで考えた案」としたことが今回上手くいったポイントだと思います。社内報告の際にも、「みんなで考えた案」という報告を心がけました。

DEW: 面白い会議室の名前もそのひとつですか？

小土井: その通りです。会議室の名前も従業員アンケートで決めました。名古屋の方言や世界のあいさつなどユニークなアイデアの中から名古屋飯の案が選ばれました。他にも、有志によるラウンジのアイデアコンペを実施しました。たくさんのアイデアを集約してデザインに反映したり、支店みんなで考える体制の構築を心がけました。

新しい支店がもたらしたもの

DEW: 私自身4年前まで旧名古屋支店で働いていたので、今回支店の雰囲気の変化に驚きました。同じ場所にいても、設計の方はもちろん、営業の方、現業の方、総務の方、いろいろな方に声をかけられたのが印象的です。

小土井: 私自身コミュニケーション量が増えているのは肌で感じますし、技研で行った運用後調査でも、従業員満足度が向上し、出社率も向上したという

結果が出ています。新しい支店ができた後に、従業員みんなが自分たちのオフィスを好きになってほしい、家族や他者に自慢できるオフィスになってほしいと、常に思っていました。

今後も、支店で働く皆さんの声や分析結果をフィードバックし、カスタマイズされ続けるオフィスになることを願っています。



インタビュー風景

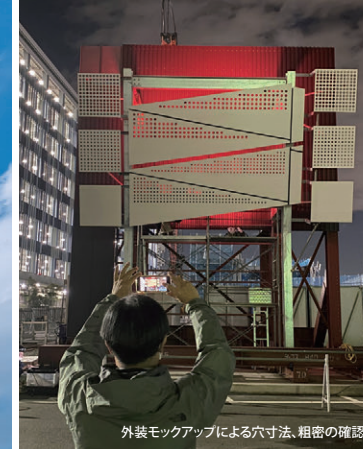
(インタビュー：DEW委員 南川、花房、島田、木村、大西)



まちの賑わい創出、新たな文化創造を目指した約1万人収容の都市型アリーナ。Bリーグ「千葉ジェッツ」のホームアリーナであると同時にコンサート・メッセなど様々なイベントにも対応している。夕方のイベント時は外装の穴から漏れ出る光に導かれながら人々が来場する。



ジェット気流・波を表現した外観デザイン
パネル割、パネル間距離を工夫することで右上に向かう流れをダイナミックに見せている



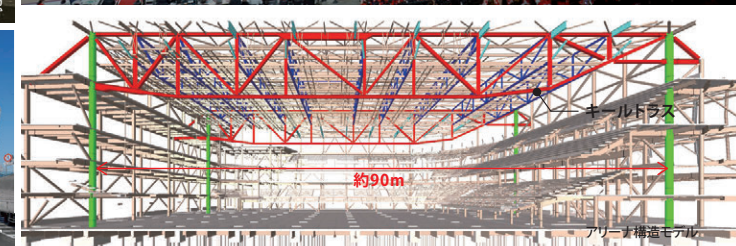
外装モックアップによる穴寸法、粗密の確認



外装施工現場 4mグリッドにモジュール化した下地鉄骨



アリーナ内部（バスケット試合時）
コートとの距離を近くすることで最後列でも臨場感が味わえるボウルデザイン



アリーナ構造モデル

非日常の世界へ人々を導く ワクワクする外装・ボウルデザイン

LaLa arena TOKYO-BAY



稼ぐを追求しワクワクをデザイン
意匠設計 鈴木 康二郎



熱狂と興奮を生むアリーナを目指して
意匠設計 前田 雄太郎



船橋市に新たな「顔」を！
意匠設計 巽 祐一



根拠とロマンスの両立に挑戦
意匠設計 江 菜



シミズの総合力で
屋根架構の合理性を追求
構造設計 久米 建一



複雑な形こそシンプルに解く
構造設計 伊藤 雅崇

ジェット気流・波を表現したダイナミックな3D曲面外装

千葉ジェッツのジェット気流、バイエリアの波を表現した外装を海外事務所HKSと協働で考えました。3D曲面を3角形平面パネルに分割、パネル間距離を調整し流れのあるダイナミックな見え方となるようこだわりました。（前田）
素材は有孔アルミパネルとし、昼は空に溶け込み、夜は光が漏れ出るデザインを目指しました。穴寸法、配置、昼・夜の見え方をシミュレーションやモックアップ

で何度も検証しました。点灯式でお客様に「良いじゃん!」と言ってもらえた際は、妥協せず頑張って良かったと心から思いました。（巽・江）
この複雑な形状を実現するため、意匠・構造・現場一体で検討しました。外装は4mグリッドにモジュール化したシンプルな下地鉄骨とし、外装下のルーバーは三角形に近似した下地鉄骨で支持し、滑らかさと面剛性の確保を両立した架構で実現しました。（伊藤）

臨場感を感じ熱狂を生むボウルデザイン

アリーナの命であるボウルは、他競技施設との差別化が求められました。それを踏まえ、客席とコートとの距離を近くし、最後列でも臨場感を味わえるデザインとしました。実際に試合で満員の客席が熱狂に包まれるのを見た時、それまでの苦労が報われる感覚でした。（鈴木・前田）
大空間を実現するため、スパン約90mの2本のキールトラスをかける架構を考えました。この2本が屋根と様々なイベント対応用機器、キャットウォーク、センタービジョン等計2000tを支えています。（久米）

世界中の人々が
ひとつの「空」を共有する
一体感の創出

2025 大阪・関西万博 大屋根リング Expo 2025 Osaka, Kansai, Japan The Grand Ring



携わった全関係者の想いがつながる
世界最大の木造建築物
意匠設計 田淵 英二



オールシズによる創り込み
構造設計 松井 秀平



設計・施工3社が一体となり
世界最大の木造建築物の実現に挑む
構造設計 船戸 佑樹



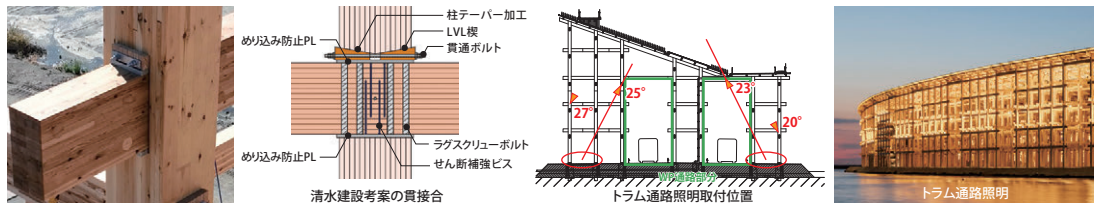
見えてもきれいな設備計画
設備設計 大多和 真



木材と調和する配管設計
設備設計 都築 弘政



少ない照明台数で外周部からの
見え方をそろえた通路照明計画
電気設計 山形 弥里



多様でありながら、ひとつ

多様な場所性・活動・人を受け入れ、それらを結び付ける建築として「多様でありながら、ひとつ」という大阪・関西万博の理念を表わすシンボルとなる建築物を実現しました。(田淵)

伝統と革新を融合させた貫接合

日本の伝統建築に採用される貫接合を現代版にアップデートし、日本の技術力を世界にアピールしています。最も海側に位置した南東工区では、眺望を望むスカイウォークが多く配置され、建物重量が大きく、さらに地盤の埋立地歴が浅いことから、重機の大規模化が制約されるという厳しい条件での設計でした。貫接合をはじめとする各接合部の実大実験を繰り返し、高剛性・高耐力・高靱性かつ施工効率の良い接合部を新たに考案しました。ディテールを創り込み、貫接合では南東工区に最適な柱テーパ加工にLVL楔の組み合わせによる固定方法とすることで、工期短縮が可能となり、生産性改革を実現することができました。(松井・船戸)

木質建築と設備の調和

木柱に沿って設けた露出配管について、位置・支持方法・材質・色をモックアップ等で細かく調整し、リング全体の木の美しさを乱さない設備の設えとしました。(大多和・都築)

外周の見え方を考慮したトラム通路照明

南東工区のリング下通路照明はトラムが通るため、照度設定(床面10lx)が低くなっています。それに対して通路部分の照度を確保しリング外周部の周囲からの光の見え方を考慮し、シミュレーションやモックアップを用いて照明の取付角度を細かく調整しました。(山形)

大屋根リングの設計担当になる胸中

田淵：計画当初から大屋根リングは世間の注目を集めていたので、設計担当者として責任の重さを感じました。その中でも大林組、竹中工務店の設計者との協働は非常に刺激的で新鮮な経験でした。竣工半年前に4000人の工事関係者がリング上で手を取り合いひとつの円を描くというイベントが行われた際、こんなに多くの仲間がいるんだという所長のスピーチは今でも心に深く刻まれています。

船戸：万博のプロジェクトは支店総動員で対応する必要がありました。大屋根リングは世界最大の木造構造物を貫構造で実現するという前例がない架構であるため、困難が予想されました。しかし、これまで経験したプロジェクトではいかなる状況でも推進できたこと、その背景にはシミズの総合力があったことを実感しており、オールシミズで取り組みれば解決できない課題はないと考え、プロジェクトを推進する責務を感じながら構造設計担当となることを決意しました。

設計期間中は、世界初の架構を国家プロジェクトとして実現しなければならないという一心で向き合っていました。その中で、大林組や竹中工務店の同年代の設計者と、気持ちをひとつにして技術的な課題をクリアし、設計を共にしたことが良い刺激でした。



現代版 貫接合の実現

DEW：貫接合について伺いたいです。場所によって接合部の作りに違いがありますが、構造的な理由で使い分けていますか。

船戸：貫接合の考え方は基本設計段階で確定していましたが、世界最大の木架構を貫接合で実現するためには、我々が担う実施設計・施工段階で、荷重条件が異なる全てのユニットで構造安全性を確保すること、技術審査をクリアすること、工期内に確実に施工できるディテールを創り込むこと等、多くの課題を解決する必要がありました。特に、大屋根リングの架構は高さがある外周側では地震時に変形しやすい特性があると共に、南東工区では歩廊が多く、建物重量が重い特徴があります。そのため、貫接合の耐力向上と架構バランス確保が緊結の課題でした。そこで我々は設計・施工が一体となって実大実験を繰り返しなが

ら貫接合を創り込み、低剛性、標準、高耐力タイプといった3種類の現代版貫接合を考案することで、世界最大の木造構造物を実現しました。

3社唯一、海側の南東工区の挑戦

DEW：海側の工区でしたが、それゆえに苦労した部分はありましたか。

松井：南東工区は海側に面しており、地盤の埋立地歴が最も浅いため、他の工区と違い、大部分を杭基礎とする必要がありました。杭工事期間があるので、他社と比べて最も遅く建方がスタートする一方、竣工時期は同じなので、いかに施工効率化を行うかが南東工区の課題でした。

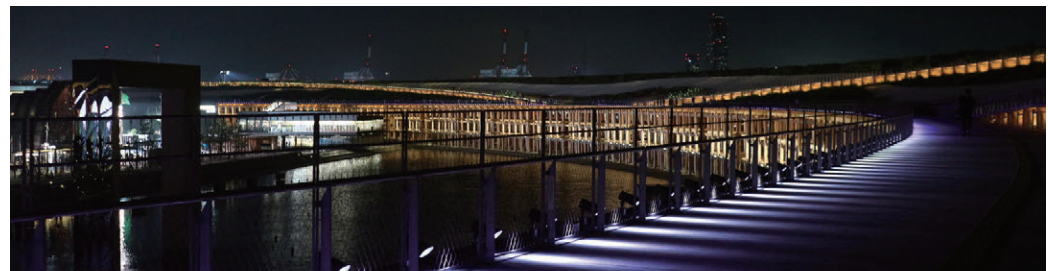
船戸：しかし他工区にはない杭工事期間を木材の製作期間として有効に利用することを考え、柱のテー

パー加工を施すことを考案しました。その結果、貫の取付作業の大幅な効率化を実現することができました。

緻密に練られた照明計画

山形：各社担当照明を決め、デザイナーの合意を得ていきました。清水建設はトラム用通路照明(南東工区)・スロープ手摺照明(全工区)・スロープ下照明(全工区)を担当しました。

スロープ手摺照明は、通路に必要な明るさを確保しつつ、周囲からのまぶしさを抑えるよう設置方法を工夫しました。具体的には、光源をスロープ側に向けて外部へのまぶしさを低減し、さらに取付部材と器具の間に隙間を設けることで通路への光の広がりを確保しています。モックアップの手摺に実際の照明器具を取り付け、照度測定と視覚的な確認を行い、照明デザイナーの承認を得ました。



(インタビュー：DEW委員 末金、佐鳥、船越、尾花、安藤、谷)

鉄と膜による

比類なき造形への挑戦

世界最大の西陣織建築を実現する

高度なエンジニアリング

飯田グループ×
大阪公立大学共同出展館
Joint Pavilion Iida Group × Osaka Metropolitan Univ.



学生時代にお世話になった
先生とのコラボに感激
構造設計 南 博之



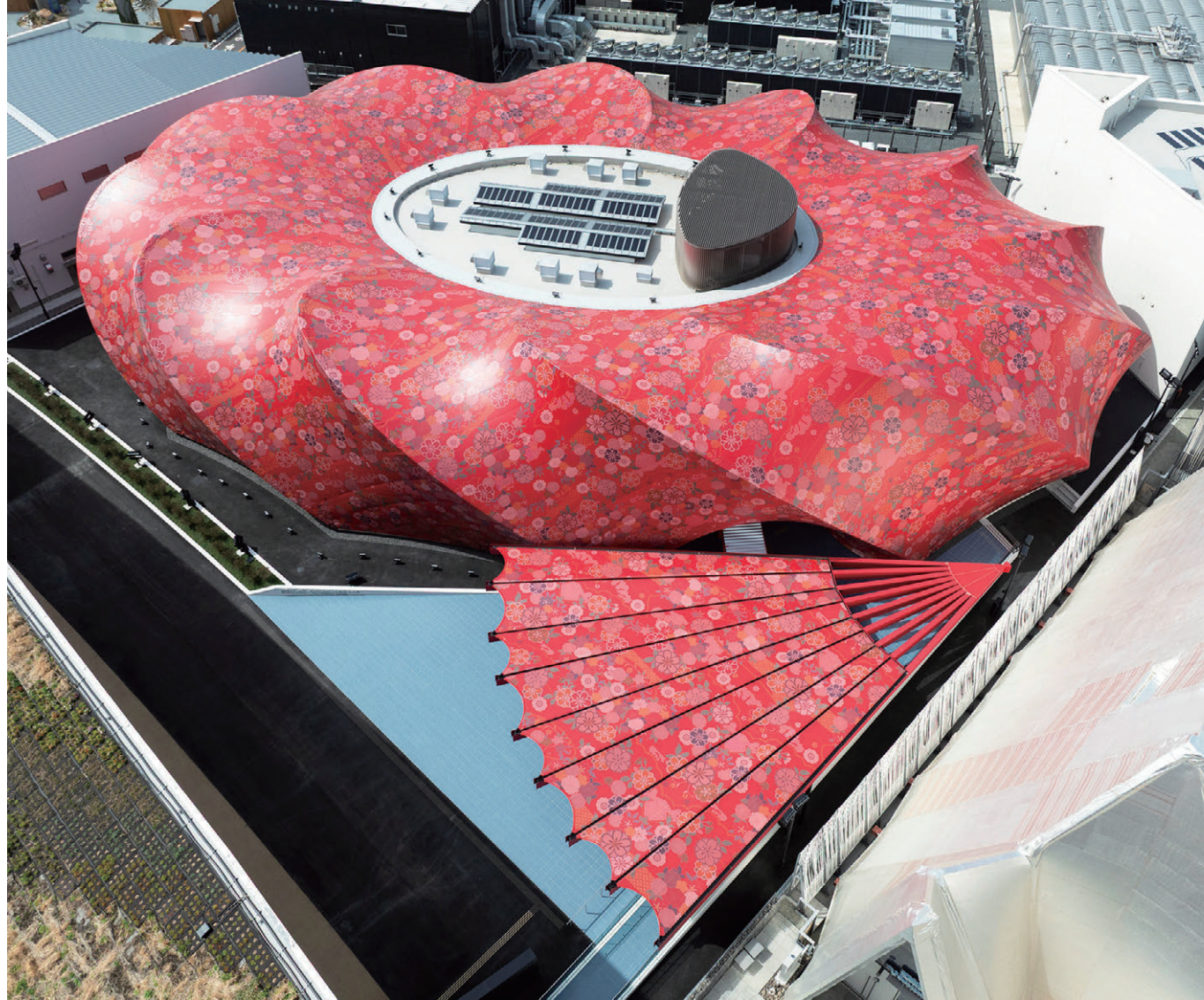
現場や鉄骨製作者と協力し
曲面鋼管構造を実現
構造設計 岡 遼悟



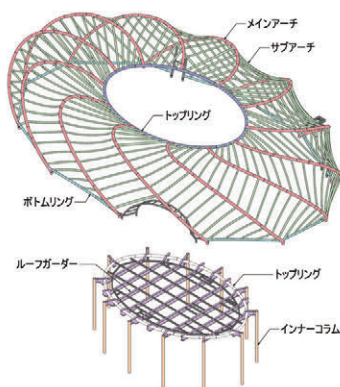
膜構造を活かした
空調システムを実現
設備設計 瀬崎 幹仁



西陣織を引き立たせる
演出を実現
電気設計 山形 弥里



千本格子



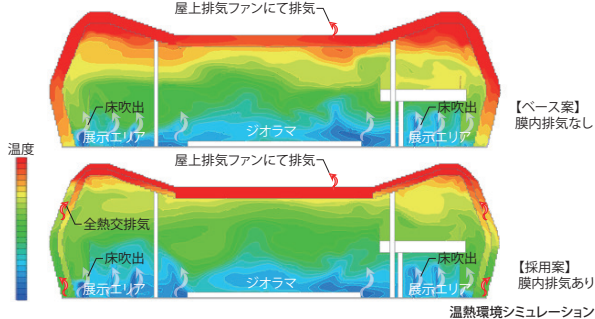
斜めアーチ千本格子構造

1方向ライメン

架構計画



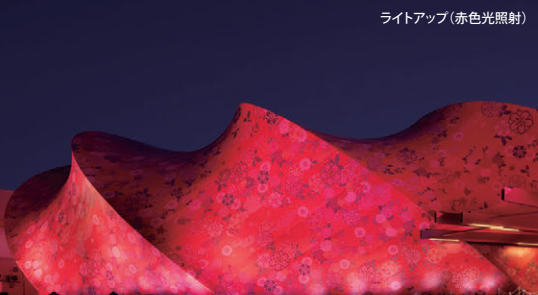
鉄骨建方中の状況



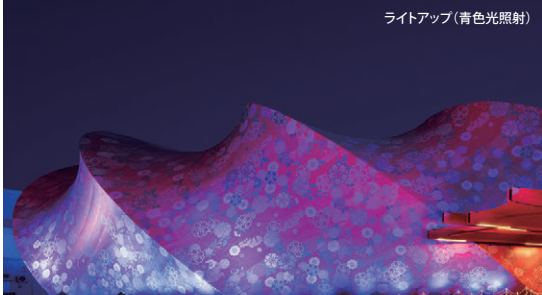
【ベース案】
膜内排気なし

【採用案】
膜内排気あり

温熱環境シミュレーション



ライトアップ(赤色光照射)



ライトアップ(青色光照射)

京町家をヒントに最適な構造を考案

西陣織を用いた膜屋根が織り成す躍動感あふれる外観。それを支持するために、傾斜させた鋼管の「千本格子」を膜の曲面形状に合わせて成形した架構「斜めアーチ千本格子構造」を提案しました。合理性を追求することで、唯一無二の外観と内部空間の最大化を実現する美しい曲面鋼管構造「斜めアーチ千本格子構造」に辿り着きました。(南) 曲げ加工した鋼管を多用する架構のため、曲げ鋼管の材料試験を実施し、部材の健全性を確認するとともに、現場と協力し、製作精度・建方精度の確保に取り組むことで「斜めアーチ千本格子構造」を実現しました。(岡)

大空間・膜構造を活かした空調計画

大空間の室内デザインにおいて、省エネルギー性を考慮し、床吹き出し空調を採用しました。居住域空間を効率的に空調するとともに、全熱交換器からの排気を二重膜内部を介して屋上から排気することで、外皮負荷の低減を可能とするシステムを実現しました。(瀬崎)

西陣織を活かした演出照明計画

西陣織が映える色を模索し、演出内容を決定しました。赤色の光を当てることで西陣織のベースの赤色を際立たせ、青色の光を当てることにより柄を浮き立たせ、雰囲気異なる演出を実現しました。(山形)

万博の建物に携わった心境

山形：人生で一度体験できるかどうかの貴重な経験ができました。万博開催中のみ建っている建物ですが「見たよ!」という人々に感想をもらえることが非常に嬉しいです。

南：大屋根リングの構造設計担当を決めるのも同時期でしたが、真っ先に飯田パビリオンの担当をやらせてください!と上職者に直訴しました。大学時代にお世話になった高松先生、大学同期の平郡さん(膜メーカーの設計担当)と一緒に、地元である関西で万博の仕事ができることになり、非常に感慨深いものがありました。

岡：設計の最終段階から入ったので、この複雑な建物を理解することに必死で、いかにして実現するか、常に緊張感を持って取り組みました。



西陣織が際立つ建物前でのインタビュー



実際の展示を使った建物概要を説明する様子

唯一無二の形状を支える構造設計

DEW：変わったデザインを構造的にどのように解決したのでしょうか。

南：当初、高松事務所から受領したのは楕円をモチーフにした稜線12本のデータです。そこから3Dの鉄骨形状を決めるまで長い道のりでした。

DEW：高松先生の理想形を実現するために短い設計期間でどう検討を進めたのでしょうか。

南：実は、敷地の拡大や建物高さの見直しなどにより、膜の稜線形状の大幅変更が6回ありました。それに迅速に対応するべく、膜稜線から構造解析モデル



実際の展示を使った建物概要を説明する様子

作成までを、Grasshopper等で半自動化して対応しました。

DEW：なるほど。苦労の末に辿り着いたのが「斜めアーチ千本格子構造」というわけですね。

南：高松先生の「万博で京都の存在感も示したい」という思いに呼応する構造計画ができたと思います。とは言うものの、実はネーミングは後付けで、当時は複雑な膜曲面を支持する合理的な構造を考え抜くことに集中していました。



施工時の仮組みの様子

複雑な建物を確実につくる

DEW：実際に組み立てるのが難しそうな形ですが、どのように現場と連携しましたか。

岡：設計時の3Dモデルを現場に引き継ぎ、メインフレームとなる鉄骨に取り合うプレート1枚1枚をモデル化して鉄骨製作を行う設計・生産プロセスを構築しました。鉄骨の製作メーカーと密に連携し、モデル通りに鉄骨製作を行うことで、複雑な形状を精度よく製作できたと思います。

DEW：製作段階もポイントだったんですね。

岡：施工段階でも非常に高い精度が求められました。工事前に全ての部材を仮組みし、現場・生産技術本部と協力して適切な組立の順番に施工計画を改善するなど、工夫しました。



構造について説明する南さんと岡さん

西陣織をいかに美しく魅せるか

DEW：ライトアップの種類が豊富ですが、お客様や意匠設計の要望はどのようなものでしたか。

山形：飯田グループ様からの要望に「来場者の関心が高まるような演出をしたい」というものがありました。使用できる照明機器が既に決まっていた中で、暗くなる時間を極力少なくし、複数の色を使ったり、光の動かし方を工夫することで様々な雰囲気演出を作りました。

DEW：西陣織を照らすという難しいお題に対して、お客様とどのように合意形成をしましたか。

山形：高松事務所(意匠設計者)と照明メーカーと協力して演出内容についてお客様と合意を図りました。事前にモックアップを作製して実際に様々な色の光を

当てることにより膜が映える色を確認しながら決めました。

DEW：他に照明でこだわった点を教えてください。

山形：膜全体が均等に照らされるように計画しました。照明の取付位置は等間隔ではなく、光の拡散方法や照射角度を調整しながら、一番美しく膜を照らす取付位置を決定しました。



2つのギネス記録認定証の前で



西陣織が浮き立つ照明

(インタビュー：DEW委員 末金、佐鳥、船越、尾花、安藤、谷)

内と外、一体で考える

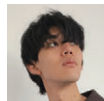
シックスセンス京都 SIX SENSES KYOTO



五感を通じて
こことからだ癒される場をつくる
意匠設計 末森 憲義



自然素材や、手仕事による仕上げで
豊かさに深みを
意匠設計 榊 竜太 (F4)



自己と「他者」
互いを投影する滞在の演出
意匠設計 入部 寛

F4: 株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



内と外、一体で考える

居心地の良い場は、人が感じている負荷をどんどん外して解放していく特性がある。そしてそのような場は、閉じた建築ではなく、外とつながるところに生まれると感じている。日本建築が備える内外の流動性は、自然の移ろい愛でる日本人の感覚を空間として顕在化させたものであり、五感を通じた心身の解放が、人に心地よさをもたらしている。内とつながる外は手つかずの自然ではない。草木や石、水などを組み合わせ、作られた自然である。私はこの建築と庭の関係に都市で豊かに生きる人の知恵・文化を感じる。千年の都が魅力的な都市として在り続けるのは、内と外が同時に設計されている場が人々を癒しているからであり、それは身体を通して感覚的に理解され、大切に守られてきたからだろう。このホテルの建築と庭が世界中のゲストの心と身体を癒し、京都の建築文化を引き継いでいくことを夢見ている。(末森)

ウェルネスとサステナビリティ、 自然と一体化するシックスセンスの 理念を具現化する

末森：シックスセンスというブランド名からも分かるように、このホテルは人の感覚へのアプローチを大切にしています。ウェルネスとサステナビリティという理念も、古くから日本で育まれてきた精神や習慣、文化と親和性が高いと思いました。全客室がフルオープンで中庭とつながり、ロビーやレストラン、スパエリアも外とつながる建具を設けています。敷地に6mの高低差があり、地下2階地上4階の構成ですが、中庭やドライエリアを設けて自然の光や風を取り込められるように工夫しました。今いるアースラボも地下2階ですが、中庭に面している為、暗さや閉塞感を感じません。敷地が交通量の多いバイパス沿いだった為、騒音シミュレーションを行い、中庭の静けさを検証しながら設計をしています。各客室の窓にはセンサーを組み込んでいて、窓を開放している間は空調が自動で停止する仕組みになっています。地下躯体を利用して雨水を貯留し、庭の散水やトイレの洗浄水に再利用しています。自然を中心に、身体感覚を大切にしたサステナブルな建物を実現できたと思います。



空間に寄り添う計画

DEW：建築計画で配慮した点、構造設備計画で重視したポイントについて教えてください。

末森：三方を山に囲まれた京都は、一年を通じて北からの風が吹いています。設備と協力して風環境のシミュレーションを行い、北側の建物高さを低くして京都の定常風を中庭に取り込んでいます。構造はRC造で6mスパンの客室を梁成500mm、柱幅400mmとして内外の一体感を実現しています。

DEW：素材選定で重視した事を教えてください。

末森：シックスセンスのコンセプトを体現する、サステナブルやウェルネスな自然素材を数多く採用しています。

下の写真の庭に使用している敷石や、燈籠は既存建物を解体した際に出たものを保存、再利用しています。室内の仕上げは天然木のフローリング、壁は左官と木の腰壁としています。無駄をなくし、循環

する素材と手仕事による仕上げが、工業製品の素材からは感じられない雰囲気醸成し、ゲストに精神的なリラクセスを提供していると感じています。



(インタビュー：DEW委員 谷、尾花、末金)

二面性ある周辺環境の狭間で それぞれの魅力を享受する ショッピングモール

エミテラス所沢 Emi Terrace TOKOROZAWA

2025年度 CFT構造賞



街の価値向上と
人の集まる拠点の創出
意匠設計 大内 祥子



自社保有技術により
合理的な大規模架構を実現
構造設計 小里 謙一



季節や時間・イベントごとに
多様に施設を彩る照明計画
電気設計 宮崎 裕由



駅前エリア側に設けられた2Fのメインエントランスは近隣の商業施設や駅とデッキで結ばれている。大屋根の軒裏は夜間になるとプログラミングにより様々な色彩の照明で彩られる。



地域の核としてのモール

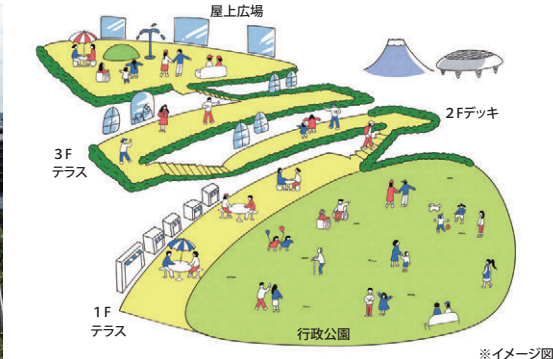
所沢駅前エリアと閑静な住宅地の境界に位置する本施設は、駅前は利用者を引き込む大屋根のあるファサード、住宅地側はセットバックした建物ボリュームを採用し、周囲に馴染む二面性のある外装計画としました。2Fレベルには駅と住宅地を繋ぐデッキが張り巡らされ、地域各所を繋ぐ新たなネットワークを形成しています。



行政公園から施設の上階へ緑が立体的に連続する住宅地側の外観



モールの中心に位置し多種多様なイベント演出が可能な半円形の広場



全方位的に巡らされた緑のネットワーク

4周が道路に囲われた外部空間は、それぞれのエリアの特性に応じ樹種を変えた植栽計画とし、回遊する楽しさを感じられるよう演出しました。壁面緑化等により立体的にも緑を配し、施設の各所に憩いの場を提供しています。樹種は所沢に由来するものを意識的に取り入れ、地域材を利用した木材ベンチも配置しています。



1Fのフードホールと行政公園の間のテラス



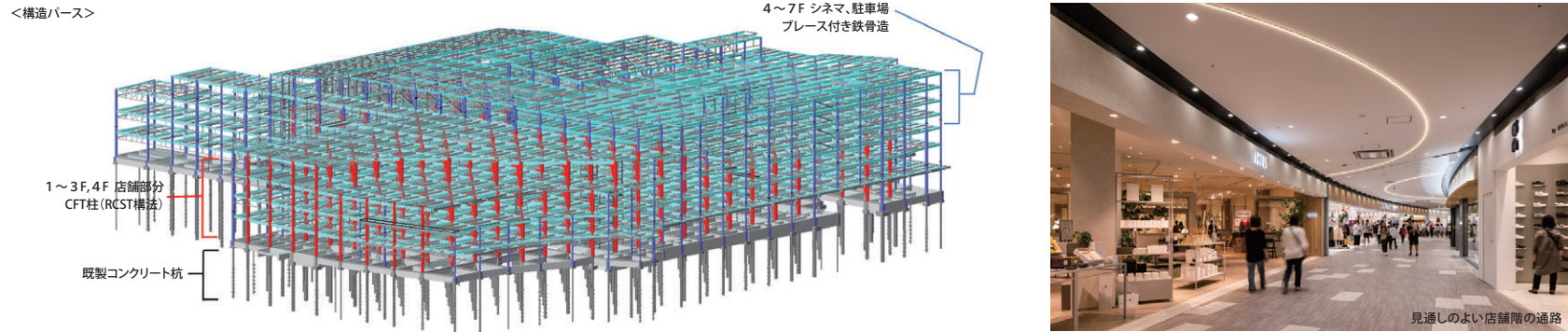
住宅地側の緑地はベンチを多く設け寄り付きやすさを確保した



2000系運転用シミュレータの一部の展示

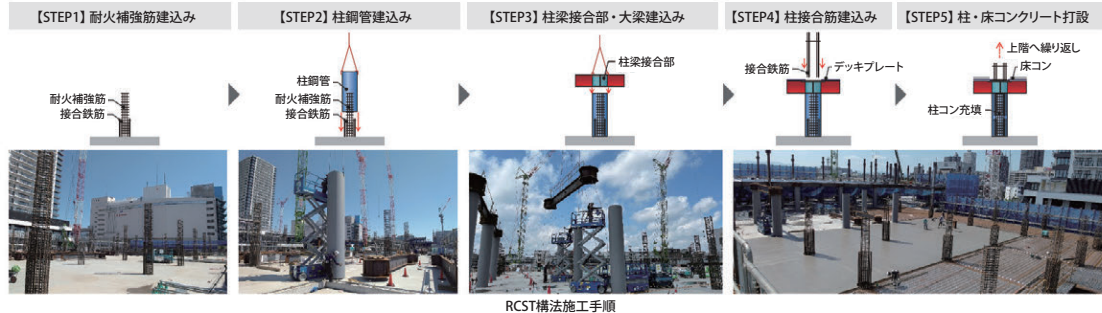
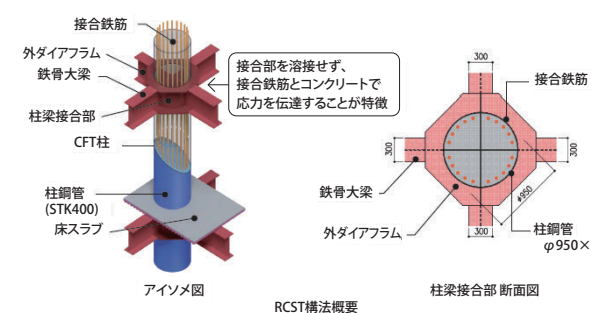
土地が持つレガシーの伝承

かつては西武鉄道所沢車両工場であった敷地の歴史を想起させるものとして、建物の内外に、工場と鉄道本線を繋いでいた「引き込み線」や車両等の展示をしています。航空発祥の地と言われる所沢市にちなみ、飛行機のアイテムも忍ばせており、様々なかたちで所沢らしさの発見ができる施設となっています。(大内)



架構計画・施工性を合理化する自社保有技術『シミズNew-RCST構法』

本建物は、1～3階および4階の一部の店舗部分にシミズNew-RCST構法を採用しています。シミズNew-RCST構法は当社保有の独自構法であり、柱をコンクリート充填鋼管柱とし、その上に鉄骨造の梁を載せ、鉄筋で定着させた複合化構法です。サーキットモール型の意匠計画に合わせて柱を配置することで、見通しのよい店舗通路となるよう配慮しています。4階から上のシネマ・駐車場部分は鉄骨造に切り替え、プレース造とすることで、シアター12室の大空間を構築しています。当社保有技術により架構計画・施工性を合理化することで、約10万m²の大規模架構を短工期で実現。事業者のニーズに最大限応えることができました。(小里)



環境負荷低減の取り組み

空調熱源には高効率な空冷ヒートポンプチャラーを採用し、またゾーンごとの分散系統配置とすることで搬送動力を削減する計画としました。高負荷なシネマ部分はシアターごとに単独の空冷HPパッケージエアコンを設置し、全熱交換器・CO₂制御等の省エネルギー制御も導入しています。物販店舗は第二種換気方式とし、換気をパスさせてWCや管理諸室で排気を行うカスケード利用により、省エネルギー化を図りました。

WC洗浄水および濯水設備には雨水をろ過処理した雑用水を利用することで上水使用量を削減し、地域の環境負荷の低減を図りました。

空調熱源および特高受変電設備はエネルギーサービスを採用することで、容易な設備管理と安定供給・環境負荷低減を実現しています。(伊藤)



思いを込めた照明・BCP計画

四季を感じる大きな窓を望み、公園と隣接した1階フードホールや4階屋内広場ではサーカディアンリズムを考慮し、調光だけでなく120色以上の調色も可能な照明を採用しました。イベントや季節ごと、時間帯や客層に合わせ、常に「快適」な空間を維持するように設定を行っています。また、照度・色温度を自動で最適化することで節電に貢献し、照明制御のための配線作業を必要としない「無線調光システム」により、間仕切り変更やイベント等の建物運用に合わせた、1台ごとの照明設定の容易な変更も可能にしています。災害や緊急時のBCP対応としては、発電機による24時間のバックアップを可能とし、帰宅困難者の一時避難エリアや事務室、防災センター等の主要諸室へ電源供給を行うことで、建物の機能維持を図っています。(宮崎)

彫刻的な超高層タワーを
中心とした空・海・緑を
つなぐ一体的大規模再開発

BLUE FRONT SHIBAURA TOWER S

BLUE FRONT SHIBAURA TOWER S



低層部 8万㎡のつくりこみと
プロジェクト推進
意匠設計 富田 潤



ウェルネスオフィスの肝となる
28階のデザイン追求
意匠設計 眞鍋 啓



弧を描き人を迎え入れる
外構デザインの具体化
意匠設計 角間 直樹



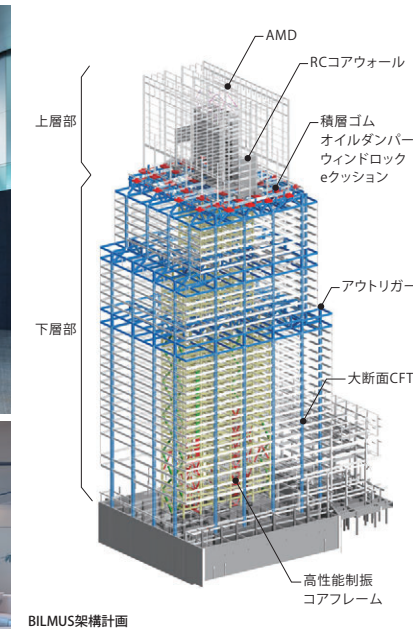
TOWER S へと続く緑豊かな
アプローチ空間の実現
構造設計 佐熊 海



眺望の価値を最大化する
オフィスの窓際環境を探索
設備設計 由井 智輝



超高層建築物における
インフラ計画の構築
電気設計 柳野 幸人



新しい東京のランドマークをつくる

周囲の景色を映しこむ端整なファサードが特徴のツインタワーを中心とした、延べ面積55万㎡の再開発計画のⅠ期工事。オフィス・ホテル・商業施設からなる高さ約228mのタワー Sでは、楢総合計画事務所の基本設計のもと、「水と緑のオアシス」をコンセプトに、東京の中心にありながら水辺に立地する場所性を生かした空間づくりを行いました。（富田）

超高層の可能性を拓く新制振システム

上層部と下層部を構造的に独立させ、地震時にお互いの揺れを打ち消し合うようにすることで、建物自体を制振装置化し揺れを半減するシステム『BILMUS』を開発・採用しました。BILMUSにより、防災拠点としての高い性能と、従来の超高層建物に比べ圧倒的に少ない柱本数による開放的な眺望の両立を実現しました。（佐熊）

次世代ウェルネスオフィスの実現

オフィスフロアにはエアフローウィンドウと放射空調＋対流空調によるハイブリッド空調システムの採用と、多機能画像センサーによる連動制御により、快適性と省CO₂の両立を実現しました。オフィスワーカーの共用フロアとなる28階では、ラウンジ・会議室の他、ジム・サウナも計画し、様々な働き方のできる環境をつくることにこだわりました。（眞鍋・由井・柳野）

どのような意気込みで取り組まれたのか
お聞かせください。

富田：低層階の全フロアを把握する意気込みで取り組み、施工図を一通り確認できました。基本設計から竣工まで6年間携わったことで、超高層案件の進め方を習得するという目標も達成できたと思います。

真鍋：現物と図面を照合することで、設計の寸法や納まりの実現を学び、設計感覚向上を目指しました。自身の図面が形になり、期待以上の点もありましたが、現場を見て気付くこともありました。

佐熊：自身が担当した外構エリアにおいてデザインを実現すること、建物というより、ひとつの街をつくるという意識で取り組みました。多くの関係者と調整し、デザインをまとめたことで、技術力だけでなく人間力も向上することができました。



共用部の説明を聞く様子

DEW：他社との共同設計を経験されたと思いますが、学びや苦労についてはいかがでしたか。

富田：モジュールや目地割へのこだわりが建築の端正さに繋がっていると感じました。大胆かつ洗練されたデザインでありながら、技術基準を逸脱することなく実現している点にも感銘を受けました。また、7階食堂の内装は他社設計によるものですが、色調や曲線を多用しつつも統一感があり、魅力的な空間に仕上げるデザイン手法を、案件を通じて学び取ることができました。

佐熊：特に外構では他社の意匠設計者が鉄骨製品検査にも立ち会い、溶接箇所の上上がり等、徹底的に細部までこだわる姿勢が勉強になりました。構造設計者として、性能、施工性を考慮した上での調整は難しかったですが、出来を見てみると、改めてそのこだわりの重要性を感じました。

由井：ゼネコンの設計者として、現場の視点に立ち、コストや施工性を考慮することは非常に重要ですが、それだけにとらわれず、妥協のない提案を書き、設計者として「良いものをつくる」姿勢の大切さを学びました。



迎撃会の様子

特に意識したこだわりや工夫

富田：7、8階のクリニックエリアでは、商業的なデザインに囲まれる中で、あえて落ち着いた雰囲気を意識し、ニュートラルな空間としました。自然光を反射するアルミ複合板の大壁で吹抜を強調した点が特徴です。

真鍋：28階の共用部では基本デザイナーの意図を汲み取り、細部の納まりを検討・提案しました。多様な仕上材について現場や関係者と対話しながら調整を進めました。

由井：施主要望を踏まえ、眺望性を確保するためのブラインド制御や快適性と省エネを両立させた空調機を実装しました。



インタビュー風景

角間：独立店舗では、地面に連続した曲線を実現するため、法的要件への対応に加え、円弧を基準とした三次元形状と製作物や外構との取合いなど、様々な調整を行い、実現することができました。

佐熊：独立店舗では、各部材に複数の役割を持たせることで、意匠的に必要な部材のみで構成しました。土留の壁は耐震壁・アーチ屋根のスラスト処理も兼ね、ガラスファサードのマリオンは構造体として屋根を支えることで、豊かな空間を実現しています。また、小屋根は視線の近さに配慮し、構造体の存在感を抑えた部材構成とし、部材の種類を絞ってユニット化することで施工性にも配慮しました。

DEW：大規模再開発案件における向き合い方について教えてください。

富田：大規模案件と言っても、他のプロジェクトと同様に日々の小さな検討の積み重ねです。同期や後輩の担当案件が次々と竣工するのを横目に、自分は減多にできない大きな仕事をしているという意識で地道に取り組みました。

角間：長期にわたる施工期間の中で、計画変更を見越した柔軟な対応や、多用途・大規模案件ならではの複雑な要件調整を経験できたことが貴重な経験でした。

佐熊：工事監理段階は、自分の決定がすぐ形になる

達成感と緊張感に満ちた、貴重な経験でした。現場に常駐して働けたことは、ゼネコンを志望した理由にも通じ、とても充実していました。

由井：プロジェクトに参加した初期は、定例での発言に躊躇していましたが、自分がこのプロジェクトを成立させるという気概を持つことが重要だと感じました。「ものづくりの最前線」の楽しさを経験できました。

榎野：自分にしかできない仕事という意識がモチベーションとなり、責任を持ち、取り組むことにやりがいを感じました。現場常駐で仲間存在を感じられたことが大きな支えとなりました。



インタビュー風景

(インタビュー：DEW委員 木村、栗津、渡邊、谷)



つながりが生む新たな イノベーション拠点

日本道路株式会社 土浦テクノBASE
THE NIPPON ROAD CO., LTD. TSUCHIURA TECHNO BASE



対話から生まれた
つながる空間

意匠設計 文由佳



木質建築と丁寧に
向き合った構造計画

構造設計 田中 斐佳



ZEBを達成した
意匠調和した環境デザイン

設備設計 瀧上 柊



道路舗装業界を代表する日本道路の2029年に迎える創立100周年事業の一環として計画された複合施設。部署を超えた連携と共創を促すため、点在していた技術研究所、研修施設、舗装機械の整備施設、さらには宿泊施設とショールームの機能を集約し、「技術の発信」と「人材育成」を目的とした新たな拠点となる施設が求められた。



デザインプロセスについて

技術研究所や機械センターなど、これまで別々の場所にあった部門がひとつの建物に入ることが今回のプロジェクトの大きな特徴でした。今まで別々で働いていた人たちが、同じ空間で働くことになる中で、どういった空間が居心地がいいのか、勤務スタイルの違いやセキュリティ面の不安をどう乗り越えていくかといった課題と一緒に向き合いながら進めていきました。

ひとつになることを考えたとき、まずはお互いの仕事をしている風景を知ること、休憩している姿をみることで、そういった“さりげないコミュニケーション”のきっかけが大事

だと思いました。そのため、2層の事務エリアは、あえて日常的につなぐために大きな吹抜と階段でつなぐ構成にしました。その階段が、上下階の移動のための空間ではなく、建物の象徴的な場所になり、人と人を繋ぐ場になることをイメージして設計しました。

私自身のフリーアドレス経験談をお話ししたり、社外のショールーム見学ツアー等をいくつか計画したりして、お客様と空間のイメージを共有できるよう意識しました。そうした対話の積み重ねの中で、お客様の想いや考えを少しずつ理解していき、研究研修棟のオープンエリアの現在の形が生まれました。

横断的な経験が支えた 一貫設計への挑戦

DEW: このプロジェクトを担当されるまでに、どのような経験をして、設計に向き合ってきたのか教えてください。

文: このプロジェクトが始まったのは、2021年11月。ちょうど入社8年目のタイミングでした。今回、初めて企画設計から竣工まで一貫通貫で設計を担当する機会をいただきました。それまでは、基本設計から実施設計までを担当した案件や、監理から関わった案件などさまざまでした。用途も商業施設、集合住宅、工場、倉庫など多岐にわたっていました。今回は複合施設だったこともあり、

今までの経験を一つ一つつなげながら積み重ねていくような感覚でした。設計を進めていく中では、部署を超えて社内のたくさんの方に相談しながら形にしていきました。

チームで育てたアイデア 対話が導いたデザインのかたち

DEW: デザインがどのように決まっていたのか、社内やお客様とのやり取りも含めて教えてください。

文: お客様の想いをもとに社内の設計チームではパースや図面スケッチ、3Dシミュレーション、イメージ画像などを共有しながら、何度も議論を重ねました。チームでの設計は、自分では思いつかない

視点が出てくることも多く、「一緒につくるって楽しいな!」と感じました。アイデアが少しずつ進化していくプロセスが楽しくて、今の形にたどり着いたときは、なんとも言えないワクワクした気持ちになりました。



新入社員の記憶が紡いだ宿泊棟

DEW: 宿泊棟のコンセプトが印象的でした。そのコンセプトがどのように生まれたのか、プロセスを教えてください。

文: 宿泊棟は新入社員の方々が使用する施設だったので、自分が入社した頃のことを思い出しながら考えました。研修が終わった後やお昼時間にみんなでご飯を食べたり、休日と一緒に遊びに行ったりと、同期との絆が深まる瞬間がたくさんありました。そうした日常の中で自然と生まれる、会話・笑い・気づきといった、さまざまな“イロ”の風景が生まれる場所があったらいいなと思い、「イロドルカイダン」というコンセプトが生まれました。



研修員に愛される空間デザイン

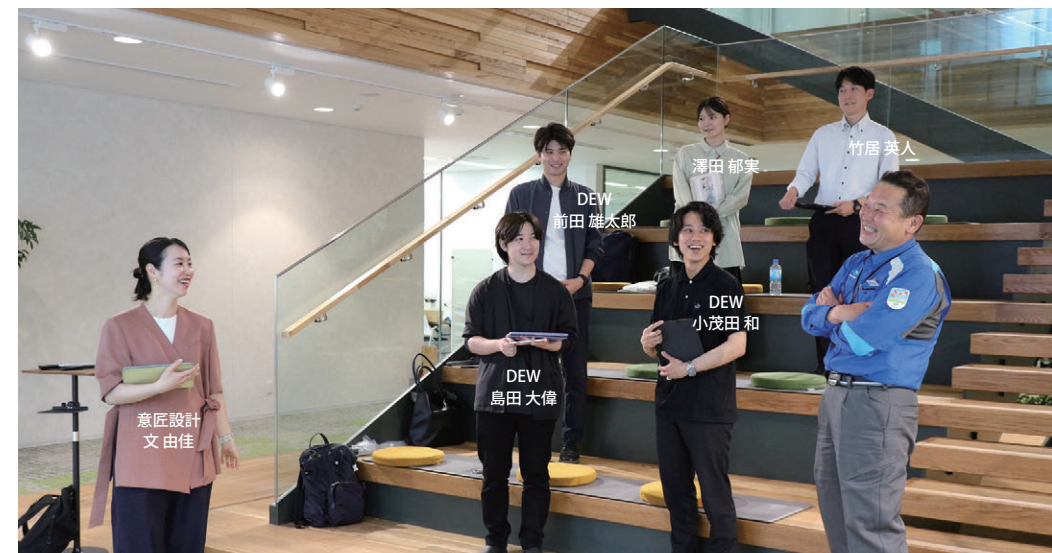
お客様: 若い社員の方々からは「大人気ですよ!」という声をいただくほど、すごく好評です。特に、仕事のオン/オフを自然に切り替えられるように、照明や視線の抜けなど、細かな部分まで丁寧に設計されている点が、居心地の良さにつながっているようです。また、空間全体で使う人に寄り添うような優しさが感じられるという点も印象的で「繊細で優しい」という声もありました。



環境とデザインの両立へ：ZEBとカーボンニュートラルへの挑戦

文: 環境に配慮した施設計画も、大きなテーマのひとつでした。研究研修棟でのZEB達成に加え、敷地全体としてカーボンニュートラルの実現に向けた積極的な取り組みを行いました。例えば、研究研修棟の階段の上部には北側採光を取り入れたハイスайдライトを設け、昼光利用制御によって照明エネルギーの削減を図りました。

また、研究研修棟と宿泊棟の外壁には西日対策としてナナメをモチーフにしたデザインを採用し、デザインと機能性の両立を心がけました。さらに、事務エリアで使用するヒートポンプ式空調機器の性能向上のため、地中設置の機材の上部には日本道路様の製品を採用し、お客様とのコラボレーションを実現しました。



(インタビュー：DEW委員 島田、小茂田、前田、谷)

新たな街並みの創出と
建物価値を高める
ウェルネスオフィス

BIZIA KOKURA
BIZIA KOKURA



建物だけで完結ではない
地域に開くオフィス
意匠設計 若杉 晋吾



利用者のウェルネスへの
徹底的なこだわり
意匠設計 木村 葵



まちの賑わいに寄与する
照明計画の実現
電気設計 小西 優斗



街並みへの貢献

小倉駅前のメイン通りである平和通りは、道路境界まで屹立した壁面で形成され、当該敷地はその平和通りの交差点に位置し、モノレールの駅も隣接した人通りが多い場所となっています。それらの状況に配慮し、交差点に面する1、2階壁面をセットバックさせ、ピロティを設けることで、地域に開いた開放的な空間を創出しました。1、2階をガラス張りとして、建物内のアクティビティが見えるように計画し、通り行く人との視覚的交錯を生み、まちの賑わいに寄与しています。夜間は交差点の行灯として抑揚ある照明配置や光のスクリーンで、歩行者の安全性の確保、沿道の賑わいの演出、空間の奥行き感の演出を行いました。通り行く人にこの空間の、映り込み、ゆらぎ、植栽等で、時のうつろい、四季の移り変わりを体感してもらえるような、個性と魅力にあふれた空間の創造を目指しました。(若杉・木村・小西)



ウェルネスオフィス

この建物は、北九州市が進める都市再生整備事業のひとつである「コクラ・クロサキリビテーション」の第一号案件であり、魅力ある市街地の形成や若者に好まれるIT企業の誘致などに取り組んだウェルネスオフィスビルです。ウェルネスオフィスをコンセプトに、積極的な階段の利用促進を図るため、内部階段を建物の中心に配置しオープン階段とした工夫をはじめとする、利用者のコミュニケーションを触発する場や多様性・ウェルネスを体現する場を設けました。基準階は小倉の大地・空・植物を表現した3色のフロアカラーで構成し、オープン階段、エレベーターホール、リフレッシュコーナーなど随所にフロアカラーを使用することで、入居フロア関係なく上下階の繋がりを意識して利用してもらう仕掛けを行いました。共用部として、基準階にはリフレッシュコーナー、多目的トイレ、フィッティングルーム、13階には小倉のまちを眺められる屋上テラスを設けてウェルネスに寄与しています。2階には、テナント入居者共用のコワーキングスペースを設け、内装は直天井で、グラデーションのあるタイルカーペットと抑揚のある照明の光だまりで、木々の木漏れ日を表現した落ち着いたきのあるリフレッシュ空間を計画しました。(若杉・木村)

若手だからこそ挑戦 利用者視点で提案した空間作り



木村：この案件は意匠設計3人で取り組み、若手は私のみだったため、様々な提案の機会をもらいました。自分が利用者だったらどんな建物、空間がいいか、どうウェルネスに繋がるのかと様々に考えることを大切にしました。また、定例の進行、説明を任せてもらい、説明する人が理解していないとお客様の納得は得られないので、先輩方にアドバイスをもらいながら、内容の理解とわかりやすく伝える方法の研究をしました。

DEW：具体的にどのような提案をしましたか？

木村：内外装のカラースキームや2階コワーキングスペースの提案をお客様も私達も納得がいくまで行いました。発注や製作期限も考えながら、提案しないといけなかった点がとても苦労しました。基本的に2案以上提案し、その上でどの案がおすすめかとその理由を説明することで、スムーズに方向性を決めることができました。竣工後、2階コワーキングスペースで利用者のリラックスした様子を見ることができ、頑張って良かったと感じました。



DEW：オフィス共用部での取り組みは何かありますか？

木村：公開空地になっている1階のピロティでは入居されている企業の皆さんが中心となった企業対抗のポッチャ大会や、お正月の餅つき大会が行われています。ポッチャ大会には市長も参加していただき、BIZIA KOKURAで市と一体になったまちづくりが行われていると実感しました。2階はテナント入居者共用のコワーキングスペースで、様々なイベントに対応できるようなスペースとしています。



細部に宿るデザインへのこだわり

木村：特に女子トイレは私の提案が通ったこだわりのつまった場所です。お客様の女性社員の方々と打合せを重ね、パウダーコーナーや洗面台などの充実などを図った案を提出しました。お客様への説明も上司に「自分の言葉で説明させてください」とお願いしました。最終的には会長へのプレゼンでも説明の機会をもらい、「女性社員とも打合せをし考えて案を作ったならその案にしよう」とおすすめの案で決定していただき、本当に良かったです。

また、エレベーターホールの階数サインの小口にもフロアカラーを使ったり、階段の人のシルエットは階段に導くような動きにしたり、細部にまでこだわりました。この案件を通して、ウェルネスとは体の健康だけでなく、心の健康も大切だと感じました。共用部は専有部と色を分けることで空間のメリハリを生みテナント入居者のリフレッシュへ繋げるなど、ウェルネスは今後も考えていきたいテーマです。

距離が近く、お互い助け合える 支店の良さ

木村：私は支店のアットホームな雰囲気がとても好きです。人数が少ない分、構造設計や設備設計など、他の分野の方との距離も近く、わからないことがあれば気軽に話を聞きやすい環境があると思います。この案件でも、相談し、協力し合うことができました。学生の皆様、是非お待ちしております！



(インタビュー：DEW委員 花房、田島、小茂田、前田、佐野、谷)

100年後の未来の子どもたちに
つながる地域の拠点づくり

元町ウェルネスパーク MOTOMACHI WELLNESS PARK



新旧/官民/大人と子どもの
共存と調和
意匠設計 武藤 真理子



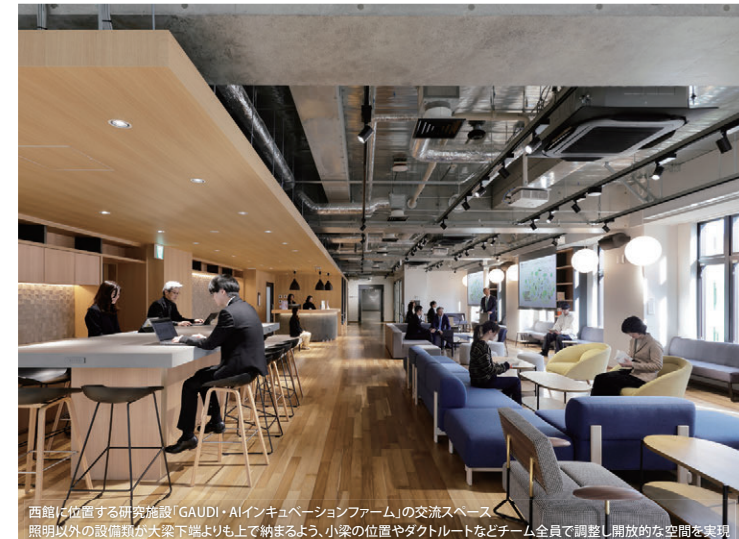
歴史ある小学校の建築意匠を
細部にこだわり復元
意匠設計 竹村 涼



交流から新たな発見や
相乗効果が生まれる場を実現
意匠設計 川地 美代子



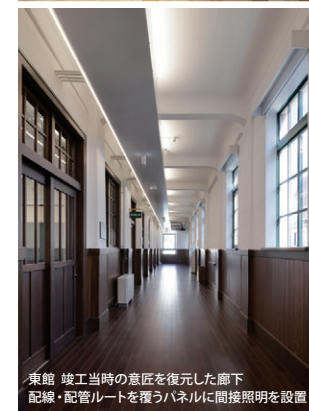
子ども園庭 左手が西館、右手が東館。4階建の新築の西館には3階レベルまでの「復元外壁」をオーバーラップさせたバルコニーを設けた



西館に位置する研究施設「GAUDI・AI-インキュベーションファーム」の交流スペース
照明以外の設備類が大梁下端より上で納まるよう、小梁の位置やダクトルートなどチーム全員で調整し開放的な空間を実現



旧元町小学校跡地
(3階建・コの字型の校舎)
復元外壁
西館
(4F/82Fの新築)
東館
(校舎を保存・改修)
元町公園
(元町小跡地と一体で再整備
2025年12月竣工予定)
元町小学校・元町公園
竣工当時の鳥瞰



東館 竣工当時の意匠を復元した廊下
配線・配管ルートを覆うパネルに間接照明を設置



東館3階 既存の木材や黒板等を再利用して教室を復元した歴史展示室



東館 東側外観
円柱部分などすべて外断熱で覆われている

旧元町小学校の校舎を保存・改修した 東館と新築の西館の調和を実現

関東大震災後に建設された復興小学校の一つ、旧元町小学校の跡地を、「100年後の未来の子どもたちにつながる地域の拠点」として再生した官民協働のプロジェクトです。新築棟と、旧校舎の保存・改修棟が隣接し、カフェやオフィス、保育施設、歴史展示室、体育館など用途が多岐に亘る中で、どのように施設として一体感を出すかが全体計画の要となりました。そこで、新築部分にも一部「復元外壁」として旧校舎の意匠から着想を得た外装を採用することで、施設のボリュームを増やして使い勝手を向上させながらも、全体の調和を図りました。

設備設計・構造設計・現場との 緊密な調整が求められる躯体表しの内観

西館の研究施設では、天井仕上のない開放的な交流スペースを計画しました。法的制約から最小限の階高設定としたため、躯体と大量の配管やダクトをスマートに納める作業は困難を極めました。東館では、外断熱工法にて建物性能を確保しつつ、躯体表しであった小学校竣工当時の意匠を復元しました。当時と比べ増加した配管・配線類、照明等を、復元空間に違和感なく設置するためには細やかな検討が必要でした。

西館・東館ともに、3Dモデルにて緻密な調整を行うことで、チーム一丸で実現することができました。(武藤)

あつぎらしさ、
厚木市文化会館らしさを
最大限活かした
市民の居場所づくり

厚木市文化会館改修事業
ATSUGI CITY CULTURE HALL RENOVATION PROJECT

 市民にとって、より居心地よく
愛着の湧く場づくりを目指しました
意匠設計 今西 志織

 自然共生型文化施設の実現で
施設ブランディングに貢献
環境共生ソリューション 室井 利夫



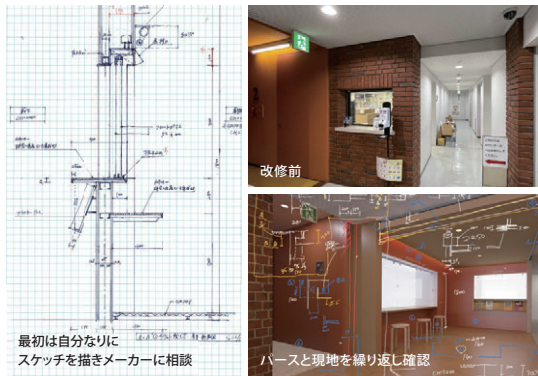
今回改修で設置した5階くつろぎスペースの円形の照明は、軒下や大ホールホワイエ、道路など、様々な角度から垣間見え、内部の賑わいを映し出す
最初は安全性等の面からペンダントライトに抵抗があったお客様からも好評だった。より良い提案実現のため、安全性と機能性を十分に検討し自信をもってお客様に伝えることの大切さを実感した

厚木の自然と文化を纏った色彩計画



内装色彩計画コンセプト資料

3階管理事務室 プラン改修



観察モニターの設置や環境イベント等を通した環境共生を図った

厚木の自然と文化を纏った色彩計画

内装色彩計画では、下記の3つを軸としました。
01. 厚木市の自然(丹沢・相模川など)と文化(相模人形芝居)を纏う
02. 既存建築の記憶・歴史・趣を継承する
03. すべての人がわかりやすく利用しやすい
上記を軸としつつ、厚木市の文化の1つ、相模人形芝居に用いられる人形の着物より日本の伝統色を抽出し色彩計画を行いました。各所に厚木らしさ・厚木市文化会館らしさを感じられる工夫をしています。

各改修部へのこだわり

玄関ロビー、くつろぎスペース、トイレの増設・新設など各部のプラン改修では、築約50年の既存建築の魅力を継承しつつ、新たな価値の創出をコンセプトとしています。3階事務室受付は既存窓口が小さいことが課題だったため、物書きでき、かつ施錠できる広いカウンターという要望を実現するため、天板のレールや視界を遮る枠のない吊りガラス戸を提案しました。振れ止め計画等の安全性、戸袋の掃除のしやすさ等のメンテナンス性といった様々なことに気を配り、メーカーや現場の協力を得て実現できました。

希少な生物 ヒメアマツバメとの共生

ヒメアマツバメとの共生への取り組みにより、音楽鑑賞で訪れた人が自然へ興味をもつ、ヒメアマツバメ観察で訪れた人が音楽へ興味をもつなど、「音楽と自然」双方の関心の高まりに期待できます。

過去・現在から未来へと 地域を繋ぐコンバージョン

Seed 1931 (旧十八銀行諫早支店有効活用) Seed 1931



古きを生かし新たな価値を創出
地域のシンボルを未来に繋ぐ
意匠設計 佐藤 慎平



地域との繋がりと開放感を演出する
通り抜け通路やガラス階段
意匠設計 木村 葵



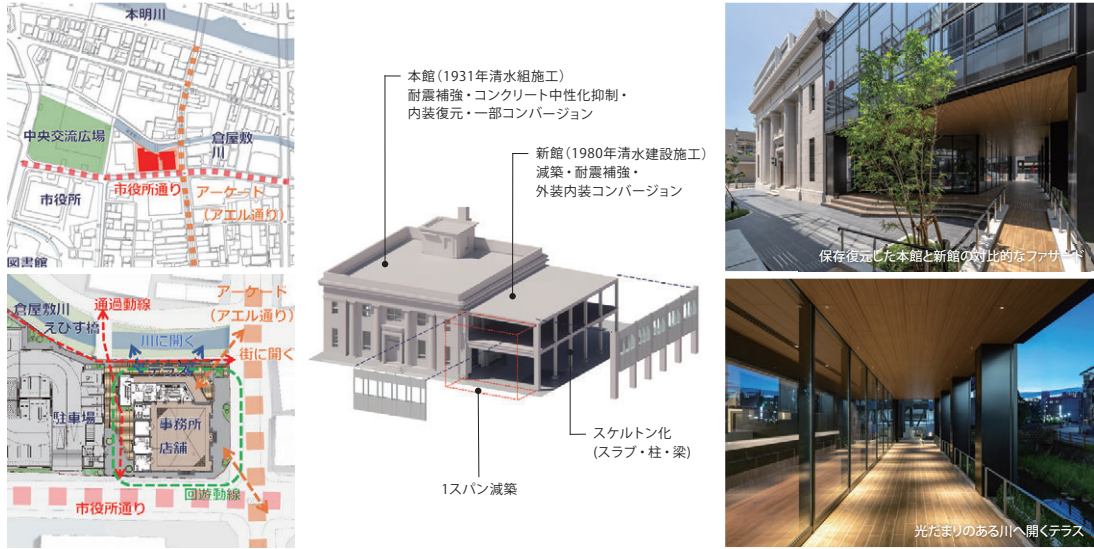
内装への影響を
最小限とした耐震補強
構造設計 藤井 美咲子



GHP+EHPハイブリッド空調で
ZEB Ready達成
設備設計 多田 枝里子



建築の魅力と価値を
最大限に引き出す照明の復元
電気設計 森谷 真帆



回遊性のある市民に親しまれる配置計画

街並みへの調和を鑑み新館を1スパン減築し、本館との壁面を揃えアーケードに開くことで、閉鎖的な銀行から入りやすい開放感のある建物としました。市民に親しまれる地域貢献施設となることを考え、川へ開くテラスや通り抜け通路で回遊性を持たせています。(佐藤・木村)

古いものと新しいものの対比と調和

列柱をモチーフとしたシンメトリーデザインの本館を忠実に復元しました。新館は、すべて解体するのではなく、一部躯体を残して、スケルトン化し、ガラスファサードをメインとした落ち着いた色調としました。新館は、本館の重厚な雰囲気を引き立てるとともに、対比・調和するデザインを意識しています。(佐藤・木村)

復元・保存・永く活用する技術

現存していないホール等の照明は、当時の写真をもとに図面化し、復元しました。ホールは天井内の耐震補強を行い、失われたエンボス加工の鋼板製天井を復元することで当初の格天井を蘇らせました。また、改修建物でありながらも積極的な省エネルギー化を行いBELS認証(ZEB Ready)を取得しています。(藤井・多田・森谷)

歴史的遺産を 未来へと紡ぐ意義

若杉：初めに既存建物の図面を見たとき、清水組の先輩方がつくった遺産の偉大さを感じました。それと同時に、この遺産を次に繋げていくことに対する意義をものすごく感じました。そういった経験ができたことが一番のやりがいです。

この建物のような、ある意味作り手の繊細な手作業が求められる建物はこれから失われていくと思います。そういった意味でもこの建物とそれを復元するプロセスを後世に残していくというに価値を感じました。

DEW：既存の建物の復元は、ある意味、真似すること



本館・新館の1階を活用したレストラン



実物から型取りをして再現した漆喰モール

アルミキャストによる
格子の復元

に近いと感じますが、設計者として考えをお聞かせください。

若杉：今回の計画のテーマは、「当時のものをそのまま残すこと」、「失われたものを復元すること」でした。「真似」た部分とすれば当時のデザインを忠実に現代の技術で「復元」したところかと思います。真似をするということで、これまでの歴史を学び、関わった人にとっては新たな蓄積として未来に繋がるのではないのでしょうか。

古賀：同感です。様々な建築を見て、このデザインを『何かに使えないかな』とデザインの引き出しを持っておくことが大切です。そうすることで、自分の好みが少しずつ可視化され、自分の正解としてまとまっていくものかもしれません。

現場での対話が導く顧客理解と デザインの決断

古賀：毎週のように現場に足を運んでくださるお客様だったので、一緒に現地を見ながら話を聞くうちに、お客様の真に求めることが明確になってきました。また、お客様が喜びそうなこと、好きそうなことも考えながら提案しました。例えば、社長室や事務室の当時の窓は、設計時には仕上で隠れていたため撤去されているものだと考え設計していましたが、解体時に現存していることがわかり、残すデザインに変更して提案しました。これについては歴史的な建物を保存するという意味でも重要でした。



社長室に残した既存の窓

揺るがぬコンセプトと 実現に向けた道筋

古賀：私は基本設計から携わりましたが、お客様のご厚意で提案のほとんどは実現に至ることができたと思います。企画設計で土台がしっかりできていたこともあり、提案をスムーズに実現していくことができたのだと思います。企画設計段階ではコンセプトメイキングが明確で、最後まで曲げずに貫くことができたのがとても良かったと思います。

DEW：プロジェクトの根幹となるコンセプトを立てる上で、最も大切にされていることは何でしょうか？

若杉：それは、最初に掲げたコンセプトを明快にし、最後まで揺るぎなく貫き通すことに尽きます。コンセプト自体の質はもちろん重要ですが、一度決めたら、それを徹底的に追求し、形にし続ける。この『やり切る力』こそが、何よりも重要だと考えています。

DEW：お客様との打ち合わせを重ねる中で、当初のテーマが様々な兼ね合いで、少しずつ純粹さを失ってしまうこともありますよね。

若杉：まさにその通りです。だからこそ、私たちは途中で『なくなならないもの』を提案することを重視しています。例えば、柱などの骨格となる部分は予算が厳しくなってもなくなりにくいですが、表層的なもの

は削られる可能性があります。予算の都合で消えてしまうような提案ではなく、たとえコストが限られていても、その本質的な価値が失われないデザイン。そうした『不可欠な要素』を設計し、提案していくことが、一つの有効なアプローチだと考えています。

古賀：ディテールへのこだわり、全体のバランス、そしてコストや施工方法における工夫。これらすべてを統合し、最適解を導き出すことこそが、真のデザインだと信じています。



インタビュー風景

(インタビュー：DEW委員 田島、小茂田、前田、佐野、谷)

尾道水道のやさしい
「さざなみ」を表現する
環境配慮型オフィス<net ZEB>

日東電工尾道事業所
増設新事務所棟
NITTO DENKO CORPORATION ONOMICHI PLANT
NEW OFFICE BUILDING EXPANSION

第38回日経ニューオフィス賞 ニューオフィス推進賞



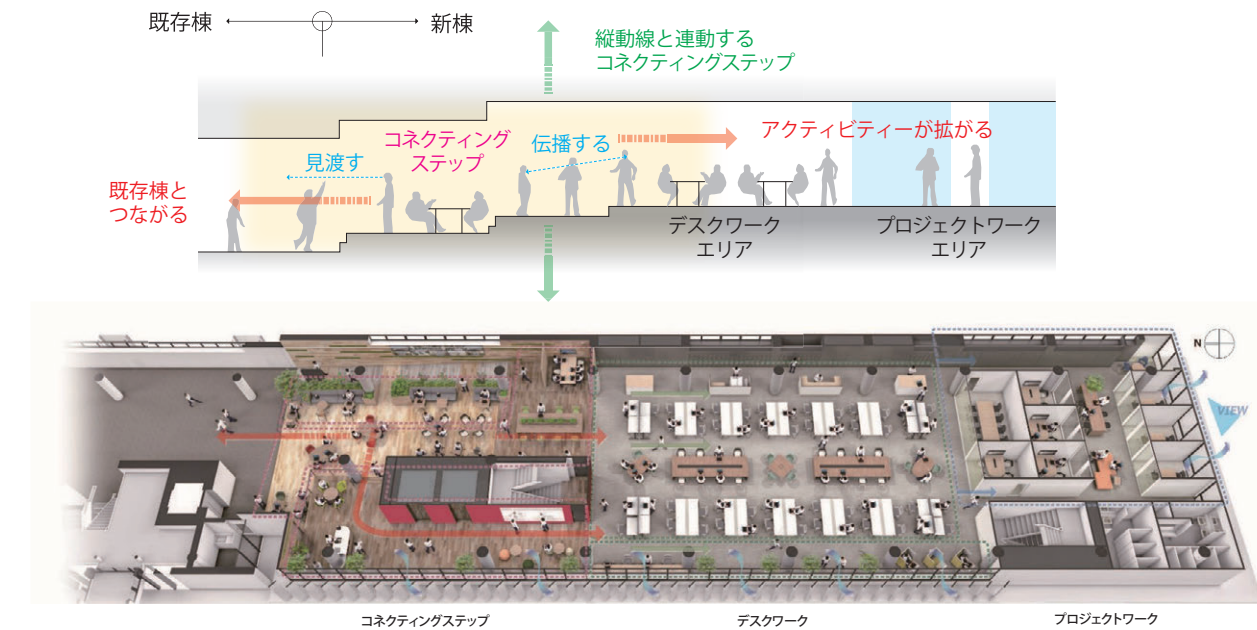
既存オフィスと新オフィス
接続部の交流スペース
意匠設計 西村 健



1～2mの跳ね出しPCaスラブ
水平庇の形成
構造設計 山石 健司



BELS ☆5、net ZEBの達成
電気設計 伊藤 祐一



既存事務所棟と新事務所棟を
結ぶことで生まれる
新たな中間領域の創出

CONNECT (人と人を繋ぐ)

既存との階高の違いを逆に活かし、異なる
3つのワークスペースを形成し最適な働く場
を創出することで、人と人を繋ぐオフィスを
実現しました。

EXTERIOR DESIGN

地上6階という眺望を活かしながら、西日対
策を外装デザインとして「尾道水道のさざな
み」を表現した縦型ルーバーを取り入れ、外
部熱負荷の軽減を図りました。

net ZEB

環境配慮型オフィスとして取り組み、太陽光
エネルギー利用によりnet ZEBを実現、BELS
5☆を取得しました。

新オフィスは既存オフィスも含めてデスクレ
イアウトを再考し、グループ制フリーアドレス
の採用など、新たな取り組みで完成しました。
新しいワークスペースによる、部署を超えた
コミュニケーションでより良い働き方に繋がる
ことを期待します。(西村)

集うことで 企業価値を
最大化する
イノベーション 拠点

HARUMI WAVE GARDEN

HARUMI WAVE GARDEN



グループシナジーを生み出す
場所づくり
意匠設計 南川大輔



晴海の「水」から、
働く人の境界線を考える
意匠設計 藤田 倫也



DEW
Tiffany Tommy

DEW
小林 稜治

意匠設計
南川大輔

意匠設計
藤田 倫也



波型を描くルーバー天井や本棚でゆるやかに分節される多目的室フロア

銀行のIT関連部門が晴海に集結 部門間を繋ぐ会議室・多目的室フロア

HARUMI WAVE GARDENは分散していたIT機能を移転集約することで「ITの知が集結」し、イノベーションを起こす交流の場となることを目指した、銀行のIT関連部門が入居するオフィスビルです。

各社が持つ情報は機密性が高いため、無秩序に交流の場を設けることはできません。そこで、交流の拠点となる会議室と多目的室を中間階に集中配置しました。会議室フロアは活発な議論を可能にする「動」的なフリーワークスペースと複数の個室が集まった「静」的な集中会議スペースで構成しました。多目的室フロアはリラックスした状態で人が集い、新しい繋がりが生まれる安らぎのカフェ空間としました。

多様な働き方を受容するオフィスフロア

オフィスフロアは全館避難安全検証による合理的な排煙・防災設備計画、明快な避難経路を考慮したプランニングとしました。また様々な検証を行い、将来的なレイアウト変更にも柔軟に対応できる「ルール」作りも行いました。「オフィスで働く意味」を問われる時代。ここに集まる波が、ただ集まるだけでなく、組織の強さを生み出す大きなWAVEとなることを願っています。

晴海に建つ新拠点にふさわしい コンセプトづくり

南川：本案件は本体設計を三菱地所設計様、建物全体のフィットアウト設計を清水建設で担当したプロジェクトでした。入居されるテナントは銀行系列のグループ会社で、計画に当たりお客様協力のもと、行内でアンケートをとっていただきました。これまでの銀行施設に求められたデザインは品格や重厚感といった印象でしたが、実際に入居される方々からはラフで親しみやすい空間や、これまでの銀行にないデザインにしてほしいという声が多くありました。

藤田：とはいえ、厳重なセキュリティ計画は外せません。アンケート結果やグループ会社が集結することで期待される交流を実現するために、日常の「境界線」に着目し「Border/Borderless」というコンセプトを提案しました。フロア内の空間を分断せず、曖昧な境界を設けて緩やかにゾーニングをするというものです。晴海らしさを意識し、その操作は水が持つ現象「波・反射・混ざり合い」をフロアごとのモチーフにして什器レイアウトや内装デザインに展開しています。



働き方を運べる打合せスペース



スケルトン天井で開放感のあるカフェスペース



晴海の景色と隣り合う歓談スペース



デッキでのインタビュー風景

ものづくりの現場で感じた 設計のやりがい

DEW：若手設計者としてどのような意気込みで取り組まれていましたか。

藤田：1年目配属直後で、自身の提案が形になるという初めての機会であったため、とても張り切って案件を担当させていただいていました。

DEW：主にどのような業務を担当されていたのでしょうか。

藤田：主にコンセプトメイキングとカラースキームの検討をしていました。カラースキームの検討では、張り切っていたせいかサンプルを用意すぎて何がいか決められなくなってしまったこともありました。

DEW：選択肢を作りすぎてかえって分からなくなってしまうことがありますよね。そんな中でどのように検討を進めて提案を行っていたのでしょうか。

藤田：現寸サンプルとCGパースを一緒に作成して検討をしていました。右も左も分からない新人だった私は、南川設計長へ繰り返し検討内容を持っていき、提案とやり直しを繰り返しました。最初は迷走して1案作るのにも苦労していましたが、お客様が共感しやすい提案ができるよう助言をいただきながら資料を用意しました。

南川：藤田さんの数多くの提案のおかげで、お客様の要望も徐々に顕在化していき、最終的にはお客様にご満足いただける空間を一緒に作り上げることができたことに喜びを感じています。

藤田：竣工見学会にて上職やお客様にデザインに込めたアイデアを感じ取ってもらえたり、従業員の方がコンセプトの意図通りに過ごしている場面を見たときはとても嬉しかったです。また、現場と一緒にものづくりを進めるプロセスは勉強になりました。施工図の読み方や設計のいろはを吸収して、次の案件に生かしています。

意匠設計
南川 大輔意匠設計
藤田 倫也

(インタビュー：DEW委員 田島、Tiffany、小茂田、谷)

ビルまるごとショーケース
ダイキンベトナム新本社

ダイキンエアタワー
DAIKIN AIR TOWER



空気の性質を建築に込め、
空間に生命を吹き込む
意匠設計 Tiffany Tommy



ダイキンブランドを象徴する
ファサードを高精度で実現
意匠設計 Bryan Reinhard



地下連壁と逆打ち工法で
都心部での地下工事に対応
構造設計 Ny Muoy Guech



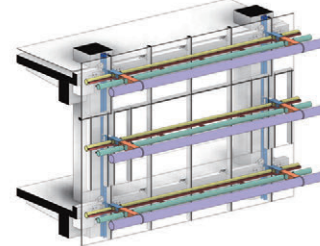
「Sustainability Leadership」
ベトナム初・世界唯一の3認証Platinum建築



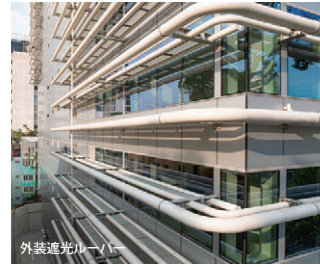
「建物構成」



「外装遮光ルーバー」



パイプルーバーは複数のピースに分割されており、
1ピースごとに設置後実測をし精度を
確認し高い品質を確保

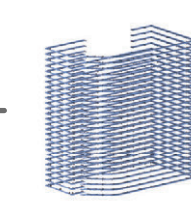


「標準的なオフィス」



都市部の狭小敷地に
対して偏心コアを採用し
最大限の幅54.3m
奥行29.3mを計画

「ダイキン技術の表現」



水平パイプルーバーのファサード
ダイキンの原点である
ラジエーターパイプから
連想したパイプルーバーで建物を包括

「ブランドアイデンティティの
発信拠点」



ダイキンエアタワー
ベトナムの空調文化の拠点
ビルまるごとショーケース



Building as Showcase

ホーチミン市中心部に位置するダイキンベトナム新本社は、「ビルまるごとショーケース」というコンセプトのもとダイキンの技術を結集した、ブランドアイデンティティの発信拠点です。外装は、ダイキンの先進性を象徴するデザインとして、同社の原点であるラジエーターパイプをモチーフにしたパイプルーバーを採用しています。これにより、大胆かつ統一感のある外観を演出しながら、熱負荷の軽減とメンテナンスデッキとしての機能性を両立させています。内装は、「空気」の流動的なイメージを可視化したデザインが特徴です。一部のフロアでは、天井を排し、ダイキンの機器がまるごと見えるデザインとしています。さらに、ダイキンの先進技術を駆使することで、エネルギー効率と快適性を大幅に向上させており、世界で初めてLEED、LOTUS、WELLのプラチナ認証を取得する予定です。(Tiffany, Bryan)

RC Structure x Unique Facade

ベトナムにおける一般的なRC構造躯体に、極めて高い精度が求められるパイプルーバーを取り付けるため、各種工夫を施しました。各階中間レベルにもルーバー支持用の鉄骨片持ち梁部材が必要となるため、カーテンウォールの裏に鉄骨間柱を設け、施工誤差の吸収、鉄骨建方、外装工事の施工性にまで考慮したディテールを採用しています。(Ny)

歯科系専門職を目指す学生の 夢を育むクリニック

みなとみらい学園歯科クリニック MINATO MIRAI GAKUEN DENTAL CLINIC



教育理念の可視化に挑戦
デザイン 三澤 直也 (F4)



みらいを育むクリニック
デザイン 谷 美由紀 (F4)

F4：株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



自然光が差し込む健康的なラウンジ



先端の歯科技工技術がガラス越しに見える



歯の基本構成を示したグラフィック



ショーアップされた特別な診療スペース



審美眼を養う目的で収集された工芸品の展示

高度な医療技術と先端の設備を 象徴するデザイン

学校法人みなとみらい学園横浜歯科医療専門学校に附属する歯科クリニックの移転プロジェクトです。クリニックが提供する高度な医療技術と、先端の設備を象徴するインテリアデザインを目指しました。空間を広く豊かに感じさせるボールド天井や、体に触れる壁や家具の角を丸めたディテールなど、アールを基調にしたデザインを追求しました。照明計画は間接照明を主に用いて、天井を見上げる事の多いクリニックにおいて患者さんの目に優しい計画としています。これらの工夫により、医療施設としてのホスピタリティと、従来のクリニックの印象から一線を画す先進的なイメージを同時に表現する事を意図しました。

歯科医療の現場で働く先輩の姿に スポットライトをあてる

本クリニックは同校のキャンパス内にあり、外を歩く学生からクリニック内部の様子が見えるようになっています。診療室やデジタルルームもシースルーになっていて、歯科医療の現場で働く先輩の姿にスポットライトが当たる計画としています。プロジェクトがはじまる時に、みなとみらい学園様よりリクエストを頂いた「歯科技工士・歯科衛生士を志す学生さんに夢を持ってもらえるクリニック」を実現する事ができたと考えています。

©Naoki Hashimoto

「ここならではの」を創るため
都市の持つ多様な個性を
取り込んだ「Urban Jungle」

新宿サブナード SHINJUKU SUBNADE

-  新宿の地下に広がる癒しの空間
緑あふれる地下街を目指して
意匠設計 中村光希 (PDS)
-  緑があふれ、太陽の光が降り注ぐ
雨の日でも快適な地下街
意匠設計 町田睦 (PDS)
-  地下空間とは思えない活気
あふれる開放的なストリートへ
意匠設計 池上千晶 (PDS)
-  都市の「躍動感」と緑や多様性を
表現した「ジャングル」をコンセプトに
デザイン 大久保敏之 (F4)

PDS：株式会社ビーディシステム
F4：株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



オールシミズの総合力で実現した 大規模リニューアル

コンペの段階からF4、PDSでデザインのディスカッションを行い、清水建設の現場のノウハウを注入していくことで初期の段階から提案の説得力を強化できました。「Urban Jungle」というコンセプトとデザインのイメージを早い段階から新宿サブナード様を含めた全員で共有できていたことが提案の実現につながりました。(中村)

関連会社の壁を越えた横刺しの連携

設計の中村さんとは関連会社同士の交換留学制度時代、共にコンペを戦った戦友です。今回、短期間での提案でしたが、事前にお互いを知っていることで、助走期間無し、いきなりの全力疾走ができました。日ごろからの関係を創ること、デザイン手法よりも早期にコンセプトを共有することの大切さをとても感じました。(大久保)

デザイン採用の喜びと達成感

構想段階では、大久保さんと設計チームで多くのスケッチを用いてデザインについて議論しました。提案したコンセプトが採用され、とても嬉しく、関わったことに喜びを感じています。コンペ資料は新型コロナの影響で動画によるプレゼンテーションとなりましたが、新しい技術を学ぶ良い機会となり、自身の成長につながりました。(町田・池上)

都市型ライブホールの
タテノリ振動遮断への
挑戦と深化

ダイナミック・ライブ・フロア®
DYNAMIC LIVE FLOOR®



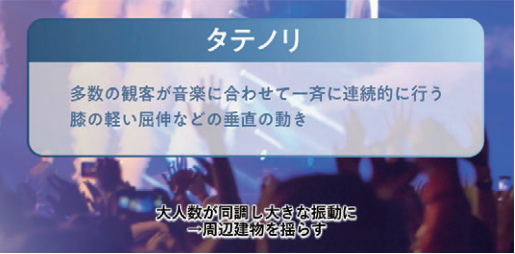
世の中の困りごとを
エンジニアリングで解決
構造設計 青木 貴



安心して下さい
タテノリしても大丈夫ですよ
構造設計 南 博之



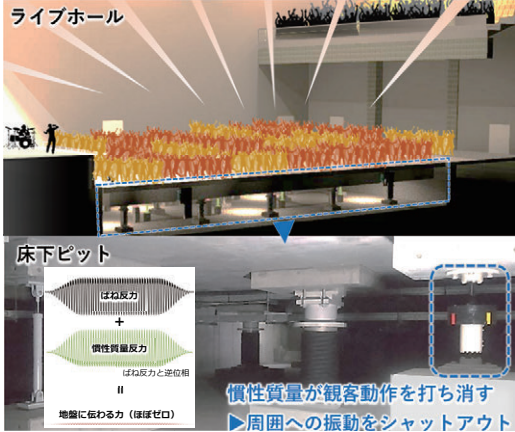
とにかく柔らかい
ばねとの闘い
構造設計 増澤 史恩



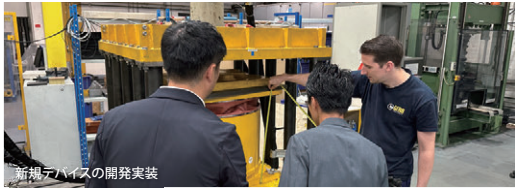
タテノリ振動とは



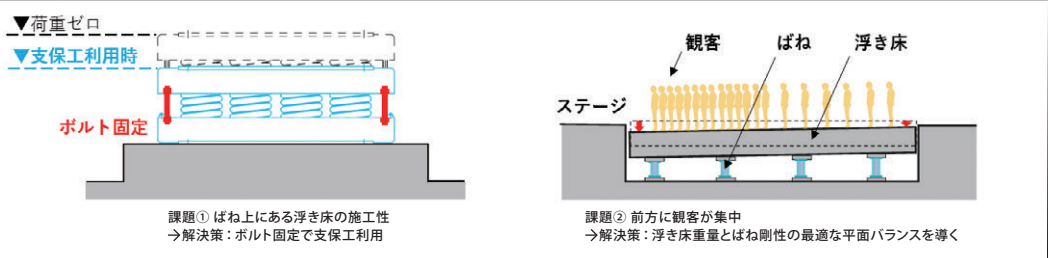
有明南H街区プロジェクトの完成予想パース



ダイナミック・ライブ・フロア®の構成



新規デバイスの開発実装



実施設計での課題と取り組み

これまでにない対策技術の実現と展開

都市の音楽ホールやアリーナでは、大人数のタテノリ動作が振動として伝わり、周辺の居住性や建物機能を阻害することがあります。この問題を根本的に解消するのが、「ダイナミック・ライブ・フロア®」(DLF)です。浮き床に組み込まれた慣性質量装置「ダイナミック・スクリュー®」に浮き床を支えるばねの振動と逆方向の力を発生させ、タテノリによる振動を打ち消します。様々な実験・検証を重ねて信頼性の高いシステムを完成させ、建物に実装しました。また実際にライブが行われている時の振動を計測することで、その効果を実証しています。開発・実装・実証を通して得た蓄積を次なる設計者に展開することで、技術は今も進化を続けています。(青木)

技術の成熟に向けて大胆かつ慎重にバトンを繋ぐ

「有明南」の設計担当としてバトンを受けた我々の挑戦は、DLF史上最大規模(3,240人)のタテノリに対応できるばねとダンパーの選定から始まりました。加えて、着席での公演やライブ以外のイベント時に浮き床を固定して使いたいという要望に応えるために「鉛直ロック機構」の新規開発・実装も手掛けました。実施設計段階で重点的に取り組んだ課題は、①ばね上にある浮き床の施工性向上と②前方に観客が集中する現象への対応でした。①は現場やメーカーと協力して、ばね自体を支保工利用できるようばねの伸縮をボルトで仮固定することにより、②は技術研究所と連携して、浮き床重量とばね剛性の最適な平面バランスを導くことにより解決しました。これらの「有明南」での取り組みがDLFの成熟を加速させると確信しています。(南・増澤)

未来につなげる 自由な学びの場

未来につながる環境アイデアピッチ stream DEW talk session



「建物×生成AI」で
新たな価値創出
GXグループ 古賀 雄貴



「飴と鞭」で実現する
ネイチャーポジティブ
グリーンインフラ 橋本 純



建築における
「Regenerative Design」を目指して
設備設計 竹島 卓磨



「サウンドスケープ」による五感を
解き放つ心地よい環境づくり
設備設計 伊藤 滉彰



「樹木型インフラユニット」による
自然と共生する環境システム
グリーンエネルギー 白石 智咲



循環の中に生きる、
原始的で現代的な暮らしの提案
意匠設計 扇野 裕大



アイデアを発信・共有し、共に磨く そして、未来につなげる

社内に点在する魅力的なアイデアを持ち寄り、発信・共有することを目的としたアイデアピッチを開催しました。このピッチでは、現在温めているアイデア、将来に向けた構想、あるいはまだ発展途上のアイデアなど、多岐にわたる発想が披露されました。

同じ悩みや課題を持つ社員同士が繋がることで、プロジェクトがより楽しく、そして「未来のものづくり」へとつながる新たなきっかけとなることを期待しています。

点と点がつながるトークセッション

多様な部署の登壇者が自由にアイデアを発信する場でしたが、始めてみると、まるで一つの大きなテーマのもと話をつないでいるように感じました。皆が目指すのは、人々が自然と柔軟に共生しながら、より豊かに暮らしていける未来なのだと思います。さらに参加者との交流を通じて、社内に同じ志を持つ仲間がたくさんいることを知り、嬉しく心強く感じました。これをきっかけに、未来のものづくりに向けてぜひ一致団結していきたいと思っています。(伊藤)



GXグループ
古賀 雄貴



グリーンインフラ
橋本 純



意匠設計
扇野 裕大



グリーンエネルギー
白石 智咲

設備設計
竹島 卓磨



アイデアピッチの会場は、ノバーレのコミュニケーションステップを活用



設備設計 山崎ひとみ



DEW
谷 泰人



社内の部署部門を超えて、環境テーマに興味を持つ人が集まった



地球や身体にやさしい食材を使用した懇親会

AIと広げる 設計の未来

留学体験記

CORE Studio at Thornton Tomasetti

構造設計 林晃平



建築×Techの世界へ

2024年6月から2025年5月の1年間、会社の留学制度を活用し、米国の構造設計事務所であるThornton Tomasetti社のニューヨークオフィスに留学の機会を頂きました。私の留学先は、CORE Studioという、デジタル・デザインの分野で世界をけん引する研究・開発の部署です。米国以外にもイギリスやインド、ベトナムにもオフィスがあり、国籍を問わず多様な人々が在席しています。建築の分野を超えた、AI等の最先端のテクノロジーを、設計プロセスに取り入れる開発を世界に先んじて行っている集団です。

未来を作る人たち

設計の枠を超えた、AIを使った設計プロセスを作り上げていく経験は、未来を作る仕事の方法として私の財産となりました。まだ世の中に無いものをとにかく作ってみて、凄いものが出来そうだと社内外を問わず大勢の人にアイデアを共有する情熱と、その情熱が多くの人を巻き込んでいく様子を留学を通して感じました。未来の設計プロセスを作る、という情熱と、周りを巻き込んでいく力が、私が留学で得たものでした。

帰国後

帰国後は、留学中に得た米国の開発者とのネットワークを活かして、新しい設計プロセスを作る仕事に挑戦しています。社内外の仲間と力を合わせて、AIと建築が結びつく世界を実現できるよう、日々挑戦を続けています。

スイスで暮らし、学ぶ

木質建築設計技術の習得を目的として、スイス東部に事務所を構えるSJB Kempter Fitze AGに留学しました。家族で渡欧し苦労した面も多かったのですが、社会との距離感が近く、教育システムやワークライフバランスから自国文化へのプライドまで、自律社会に支えられる内陸永世中立国での生活は、色々な刺激がありました。

構造エンジニアの職能とは何か、再解釈

仕事をする際には、自分が解決すべき問題は何なのか、課題設定から始まり、フィージビリティスタディでは特にその重要さが如実に現れます。建築家がパースや図面に込めた意図を抽出し、コンセプトの純度を高めて、構造エンジニアとして何を提示するか。課題設定はネガティブな問題を探すことではなく、能動的に何をすべきか考えるプロセスであることを改めて理解しました。

なまものを扱うということ

実務や生活を通して、様々な木質部材の在り方や無理のない適用例を体感し、設計技術を含む建築技術は土地の社会・文化の歴史の延長にあることを実感。材料特性・製作加工プロセスを理解し、リスクを最小限にして性能を最大限発揮できる方策を考える習慣がついたことは、大きな経験でした。自国文化を再考し、日本の伝統木造にも継続して目を向ける意識を持ちました。様々な木質プロジェクトに幅広く関わり、コンセプトを昇華した技術提案ができるよう努力したいと思います。



木で創る 構造エンジニアリングの 視点

留学体験記

SJB Kempter Fitze AG

構造設計 西川航太

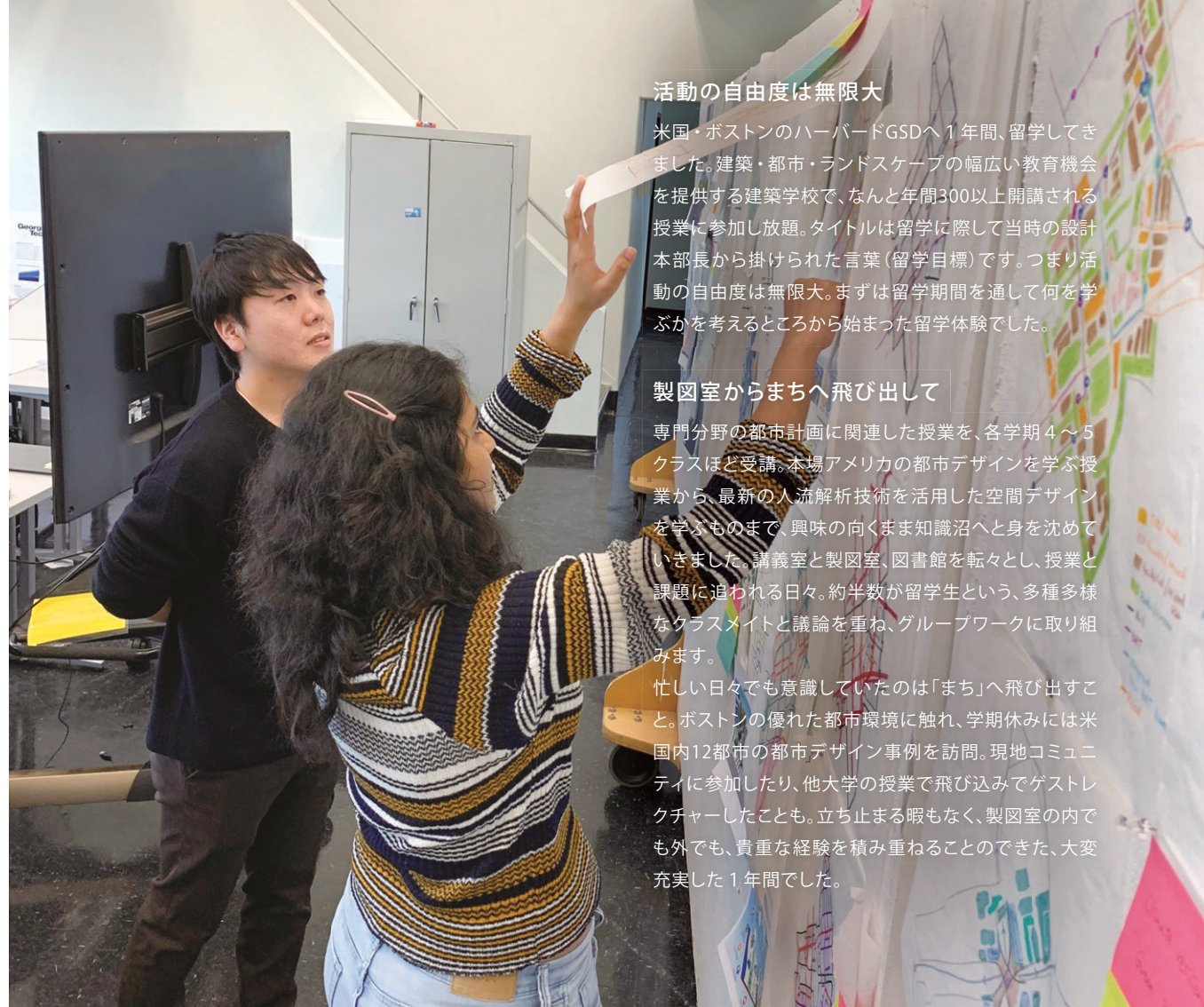
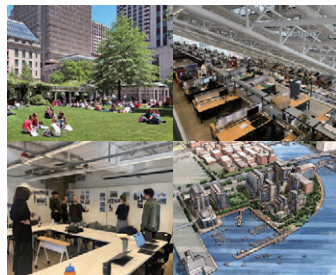


シミズの
まちづくりを牽引する
都市デザイナーを目指して

留学体験記

Harvard Graduate School of Design

開発計画 田崎 智之



活動の自由度は無限大

米国・ボストンのハーバードGSDへ1年間、留学してきました。建築・都市・ランドスケープの幅広い教育機会を提供する建築学校で、なんと年間300以上開講される授業に参加し放題。タイトルは留学に際して当時の設計本部長から掛けられた言葉(留学目標)です。つまり活動の自由度は無限大。まずは留学期間を通して何を学ぶかを考えるとところから始まった留学体験でした。

製図室からまちへ飛び出して

専門分野の都市計画に関連した授業を、各学期4〜5クラスほど受講。本場アメリカの都市デザインを学ぶ授業から、最新の人流解析技術を活用した空間デザインを学ぶものまで、興味の向くまま知識沼へと身を沈めていきました。講義室と製図室、図書館を転々とし、授業と課題に追われる日々。約半数が留学生という、多種多様なクラスメイトと議論を重ね、グループワークに取り組みます。忙しい日々でも意識していたのは「まち」へ飛び出すこと。ボストンの優れた都市環境に触れ、学期休みには米国内12都市の都市デザイン事例を訪問。現地コミュニティに参加したり、他大学の授業で飛び込みでゲストレクチャーしたことも。立ち止まる暇もなく、製図室の内でも外でも、貴重な経験を積み重ねることのできた、大変充実した1年間でした。

インクルーシブな職場での学び

ロンドンの「BURO HAPPOLD (以下BH)」に1年間、Lighting Designerとして、企業留学し、光環境や照明計画について実践的に学びました。BHは世界40拠点、3,500人を超えるエンジニアやデザイナーが在籍する国際的なコンサルティング会社です。BHでは、インクルーシブな職場環境がしっかりと根付いており、インターンのような立場である私の意見や知識にも真剣に耳を傾け、議論してくれる姿勢に驚きました。多様な個性や価値観が尊重され、誰もが帰属意識を持てる企業文化が醸成されています。多国籍な従業員が集うロンドンならではの環境も影響しているのでしょう。私自身が感じたこの心地よさを、今後は周囲にも伝えていけたらと思います。

高い環境意識

ヨーロッパでは、環境に対する法規制や設計者・施主・メーカーの意識が日本よりもとても高いと実感しました。担当したプロジェクトでは、既存照明器具を回収し新品として再製造するリマニュファクチャリングを取り入れ、循環経済についても深く考える機会となりました。外灯計画では「コウモリ」を生息環境保護まで検討するなど、環境配慮の幅広さに驚かされました。この1年は、私にとって非常に濃密で貴重な経験となりました。今後も学んだことを活かし、日々の業務に還元していきたいと思っています。



光環境を学び、
インクルーシブな職場を
体感したロンドン留学

留学体験記

BURO HAPPOLD Lighting Design Team

電気設備設計 笹部 和代



創造性の発露
一粒の雫は潮流のごとく

多様な学び・成長・挑戦の場
stream DEW 2025



未来への新たな可能性、その源流となる

全国の設計部から集まったstream DEWメンバーが、それぞれの「やってみたい」「挑戦したいテーマ」を持ち寄り、自発的な活動を展開しています。
メンバーの意欲に基づき、テーマごとに小委員会や分科会が立ち上がりました。それぞれのグループが独自の企画を進め、多岐にわたる活動が同時並行で進行しています。
この活動は、設計部に留まらず、やがて社内他部門との連携へと発展しました。
技術研究所や東京木工場との協働によるモノづくり、さらには外部の家具メーカーとの新素材を用いた未来の家具開発など、社内外の垣根を越えたコラボレーションが生まれています。
一人ひとりの個性と創造性が混ざり合うことで、どのような未来が拓かれるのか。その静かなる可能性に、私たちは期待を寄せています。



大熊町大野駅西交流エリア CREVAおおくま

建築主：大熊町
主要用途：事務所・展示場・自動車車庫
意匠設計：瀧尾 剛史・南野 友子・吉田 祐二・松本 慎司・奥 浩
構造設計：田中 初太郎・久米 建一・安藤 佳奈・鳥越 さくら
設備設計：水原 一樹・辻 裕次・藤井 孝行・戸梶 涼子
電気設計：中澤 公彦・瓦 大介・中尾 善弘
設計 JV：株式会社 関・空間設計
インテリア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
代田 哲也・坂口 漢・鈴木 葉梨子・見角 彩楓
照明デザイン：有限会社 ICE 都市環境照明研究所
敷地面積： 8,126.48 m²
建築面積： 4,320.83 m²
延床面積： 10,308.69 m²
構 造：S造+木鉄ハイブリッド架構(屋根部)
規 模：地上3階
竣工年：2024年
所在地：福島県双葉郡大熊町大字下野上字大野116-5

大熊町大野駅西交流エリア クマSUNテラス

建築主：大熊町
主要用途：商業施設・広場
意匠設計：南野 友子・吉田 祐二・奥 浩
構造設計：久米 建一
設備設計：古本 美希・山本 昌芳・阿部 英俊
電気設計：瓦 大介・澁谷 明広
設計 JV：株式会社 関・空間設計
インテリア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
代田 哲也・岡 予悠・坂口 漢・見角 彩楓・多田 眞里子
照明デザイン：有限会社 ICE 都市環境照明研究所
サインデザイン：株式会社 OK デザイン室
敷地面積： 15,689.90 m²
建築面積： 1,818.50 m²
延床面積： 1,648.71 m²
構 造：S造
規 模：地上1階
竣工年：2025年
所在地：福島県双葉郡大熊町大字下野上字大野116-6

両国M-1Garden(大坪電気本社ビル)

建築主：大坪電気株式会社
主要用途：事務所、児童福祉施設等・店舗・駐車場
意匠設計：五ノ井 浩二・古株 友彦・岡崎 真也・竹中 祐人・江頭 樹
構造設計：久保山 寛之・小澤 祐周・板原 泰樹・近藤 恭一郎
設備設計：高橋 満博・天田 靖佳・盛川 岳雄・重盛 洸・小杉 健祐
電気設計：伊藤 靖・秋山 卓郎・遠藤 聡人
ワークプレイス与条件策定に関するFM業務：渡會 実穂
コンストラクションマネジメント：株式会社佐藤総合計画
ランドスケープ・外構デザイン：合同会社ランドスケープ81
敷地面積： 1,036.42 m²
建築面積： 821.81 m²
延床面積： 5,595.44 m²
構 造：S造(一部CFT造)
規 模：地上8階・塔屋1階
竣工年：2025年
所在地：東京都墨田区緑一丁目11-2

清水建設 名古屋新支店

建築主：清水建設株式会社 名古屋支店
主要用途：事務所
意匠設計：嶋田 将吾・小土井 元規
構造設計：内本 英雄
設備設計：瀬崎 幹仁
電気設計：阿津地 啓亮・岡 彰史
ワークスタイル・ワークプレイス基本計画：奥山 昌則・田中 厚三・小川 麻衣子
コンピュータেশショナルデザイン：山下 麟太郎
ICT 設備デザイン：黒根 隆史・小林 直樹・矢吹 祐真
インテリアデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
敷地面積： 4,820.79 m²
建築面積： 3,318.02 m²
延床面積： 40,049.02 m²(建物本体)、4,616.89 m²(10~11階 専有面積)
構 造：RC造(一部S造)
規 模：地上16階・塔屋1階
竣工年：2024年
所在地：愛知県名古屋市中区丸の内一丁目16番15号

LaLa arena TOKYO-BAY

建築主：株式会社 TOKYO-BAY アリナ
主要用途：観戦場
意匠設計：長嶺 博・前田 雄太郎・鈴木 康二郎・賀 祐一・江 葉
構造設計：西谷 隆之・久米 建一・伊藤 雅崇
設備設計：山崎 ひとみ
電気設計：中澤 公彦・天野 裕太
外装コンセプトデザイン：HKS,Inc
ランドスケープデザイン：SWA Group
VIP 内装デザイン：三井デザイン株式会社
敷地面積： 19,978.52 m²
建築面積： 13,344.01 m²
延床面積： 31,117.74 m²
構 造：S造
規 模：地上4階
竣工年：2024年
所在地：千葉県船橋市浜町2丁目5番15号

2025 大阪・関西万博 大屋リング

建築主：公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会
主要用途：歩廊
意匠設計：田淵 英二
構造設計：松井 秀吾・船戸 佑樹
設備設計：大和 和 真・都築 弘政
電気設計：山形 弥里
敷地面積： 88,433.86 m²
建築面積： 60,945.97 m²
延床面積： 66,825.07 m²
構 造：木造
規 模：地上2階
竣工年：2025年
所在地：大阪府大阪市此花区夢洲東1丁目11地先
(2025年日本国際博覧会場内)

飯田グループ×大阪公立大学共同出展館

建築主：飯田グループホールディングス株式会社
主要用途：展示場
意匠設計：株式会社高松伸建築設計事務所
構造設計：南 博之・岡 遼悟
設備設計：瀬崎 幹仁
電気設計：山形 弥里
敷地面積： 3,496.26 m²
建築面積： 2,119.19 m²
延床面積： 2,928.21 m²
構 造：骨組鋼構造(一部S造)
規 模：地上2階・地下1階
竣工年：2024年
所在地：大阪府大阪市此花区夢洲東1丁目11地先
(2025年日本国際博覧会場内)

シックスセンス京都

建築主：合同会社 東山閣 (AM：リシェ・マネジメント株式会社)
主要用途：ホテル
意匠設計：吉田 進一・末森 善義・入部 寛
構造設計：廣羽 直樹・船戸 佑樹・藤井 雅之・宮崎 裕一・小林 卓昭・谷 豊子・西田 愛
設備設計：伊藤 統
電気設計：町澤 真一朗・高下 晴臣
プロジェクトマネージャー：株式会社日本設計
インテリアデザイン：BLINK Design Group
ローカルデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス 柳 電太
ランドスケープデザイン：株式会社プレイスメディア
照明デザイン：株式会社ライティング プランナーズ アソシエーツ
敷地面積： 4,745.38 m²
建築面積： 3,321.21 m²
延床面積： 11,804.44 m²
構 造：RC造(一部S造)
規 模：地上4階・地下2階
竣工年：2023年
所在地：京都府京都市東山区妙法院前側町 431

日本道路株式会社 土浦テクノBASE

建築主：日本道路株式会社
主要用途：事務所
意匠設計：山田 航司・文 由佳・秋田 湧大
構造設計：岡崎 真大・田中 斐佳・服部 恵多・岩佐 郁希
設備設計：瀬上 航
電気設計：長牛 康太郎・谷川 航太
ランドスケープデザイン：合同会社ランドスケープ81
敷地面積： 41,434.44 m²
建築面積： 6,345.35 m²
延床面積： 9,977.21 m²
構 造：S造
規 模：地上3階
竣工年：2024年
所在地：茨城県土浦市おまつ野一丁目4番

エミテラス所沢

建築主：株式会社西武不動産・住友商事株式会社
主要用途：物販店舗・飲食店・サービス店舗・映画館・自動車車庫
意匠設計：川西 高弘・平賀 直樹・市原 裕之・和田 浩・松田 大・大内 祥子・井上 直・大内 遼平・潮田 祐樹
構造設計：伊藤 靖・武田 裕介・室 重行・熊玉 皓一・小里 謙一・藤越 智哉
設備設計：長田 真一郎・土田 武志・鈴木 淳彦・伊藤 統
電気設計：高橋 宗純・町澤 真一朗・田川 寛裕・田邊 美弥・宮崎 祐由・吉野 文也・塩澤 美由子・角田 祥祐・小野 圭介
敷地面積：約 34,000 m²
建築面積：約 28,000 m²
延床面積：約 129,000 m²
構 造：RCST+S造(商業棟) / S造(駐車場棟)
規 模：地上7階
竣工年：2024年
所在地：埼玉県所沢市東住吉10-1

BLUE FRONT SHIBAURA TOWER S

建築主：野村不動産株式会社・東日本旅客鉄道株式会社
主要用途：事務所・ホテル・商業施設
意匠設計：佐藤 剛也・上田 昌弘・森 亮人・駕川 幸佑・富田 潤・眞鍋 啓・角岡 直樹・相良 俊男・中村 謙・富田 文悟・藤原 寛・川地 美代子
構造設計：今井 克彦・岡本 高晴・佐藤 宏・青木 貴・佐熊 海・熊谷 拓磨・津曲 敬・服部 恵多・熊玉 皓一・黒崎 健太・濱 智貴・牛坂 伸也・吉田 直人
設備設計：清水 洋・中本 俊一・由井 智輝・山田 矩胤
電気設計：菅 裕之・柳野 幸人・鈴木 達也
都市計画許可対応：日下 雄一郎・本田 真大・松浦 通・湯浅 晃一・山崎 武二・重松 創智
監 修：野村不動産株式会社一級建築士事務所
設計・監理：株式会社横総合計画事務所
オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン・リミテッド
株式会社日建設計
設計・監理(商業エリア)：株式会社乃村工務社
サインデザイン：有限会社井原理安デザイン事務所
インテリアデザイン(オフィス共用エリア)：グンスロー・アンド・アソシエーツ・インターナショナル・リミテッド

敷地面積： 40,104.29 m²
建築面積： 28,365.67 m²(1+11期)
延床面積： 267,424.57 m²(1期)
構 造：S造・SRC造・RC造
規 模：地上43階・地下3階・塔屋2階(1期)
竣工年：2025年(1期)
所在地：東京都港区芝浦1-1-1

日本道路株式会社 土浦テクノBASE

建築主：日本道路株式会社
主要用途：事務所
意匠設計：山田 航司・文 由佳・秋田 湧大
構造設計：岡崎 真大・田中 斐佳・服部 恵多・岩佐 郁希
設備設計：瀬上 航
電気設計：長牛 康太郎・谷川 航太
ランドスケープデザイン：合同会社ランドスケープ81
敷地面積： 41,434.44 m²
建築面積： 6,345.35 m²
延床面積： 9,977.21 m²
構 造：S造
規 模：地上3階
竣工年：2024年
所在地：茨城県土浦市おまつ野一丁目4番

BIZIA KOKURA

建築主：株式会社ミクニ
主要用途：事務所
意匠設計：若杉 晋吾・畠本 祐司・木村 葵
構造設計：本石 寿・糸川 真耶・藤井 雅之
設備設計：椿 信孝・新野 将平・鈴山 洋平
電気設計：宮原 晋一郎・小西 優斗
敷地面積： 1,252.75 m²
建築面積： 855.92 m²
延床面積： 9,857.93 m²
構 造：S造
規 模：地上13階
竣工年：2024年
所在地：福岡県北九州市小倉北区魚町3-5-15

元町ウェルネスパーク

建築主：文京区・学校法人順天堂
主要用途：認定こども園・集会場・事務所・体育館・保育所・自動車車庫(西館)・児童福祉施設等・その他(歴史展示・地域交流スペース)(東館)
意匠設計：大石 茂・岡嶋 亜都夫・田中 忍・香月 孝一・竹村 涼・武藤 真理子・川地 美代子・石井 康平
構造設計：田中 初太郎・津曲 敬・磯山 貴志・後藤 健吾・根本 光・中神 陽平
設備設計：辻 裕次・町田 晃一・高雄 大介・三宅 統美香・河西 昌隆・塚原 和佳奈
電気設計：寺島 大・松田 光弘・宮原 晋一郎・中尾 善弘・笹部 和代・牧島 菜未
インテリア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
敷地面積： 2,855.75 m²(西館) / 1,287.96 m²(東館)
建築面積： 1,590.82 m²(西館) / 603.65 m²(東館)
延床面積： 7,733.05 m²(西館) / 1,810.22 m²(東館)
構 造：RC造(一部S造)
規 模：地上4階・地下2階・塔屋1階(西館)
竣工年：2024年
所在地：東京都文京区本郷1丁目1番19号

厚木市文化会館改修事業

建築主：厚木市
主要用途：公会堂
意匠設計：内丸 雅清・今西 志織
構造設計：小林 俊樹・久米 建一
設備設計：小泉 弘
電気設計：瓦 大介・松田 光弘
環境共生アドバイザー：室井 利夫
意匠設計：株式会社環境デザイン研究所
敷地面積： 15,549.24 m²
建築面積： 5,106.96 m²
延床面積： 12,220.89 m²
構 造：SRC造
規 模：地上6階・地下1階
竣工年：2024年(既存建物竣工：1978年)
所在地：神奈川県厚木市恵名1-9-20

Seed1931(旧十八銀行諫早支店有効活用)

建築主：株式会社九州ガスホールディングス
主要用途：店舗・事務所・駐車場
意匠設計：若杉 晋吾・古賀 清和・佐藤 慎平・木村 葵
構造設計：本石 寿・藤井 美咲子
設備設計：椿 信孝・多田 枝里子・小林 遼一
電気設計：森谷 真帆
歴史建築保存指導：岡 雅也
立体駐車場設計：株式会社内藤ハウス
敷地面積： 1,907.69 m²
建築面積： 1,380.14 m²
延床面積： 4,310.06 m²
構 造：S造(一部RC造)
規 模：地上4階
竣工年：2024年
所在地：長崎県諫早市本町5番1号

日東電工尾道事業所 増設新事務所棟

建築主：日東電工株式会社
主要用途：事務所
意匠設計：津島 英介・中島 仁志・西村 健
構造設計：石田 雄一・山石 健司
設備設計：津坂 剛男・田中 和 真
電気設計：伊藤 祐一・南島 新樹
ワークプレイス：田中 厚三・宮崎 浩英
環境計画：太田 望
工事監理：株式会社日建設計
敷地面積： 106,125.75 m²
建築面積： 1,194.90 m²
延床面積： 5,864.56 m²
構 造：S造
規 模：地上6階・塔屋1階
竣工年：2024年
所在地：広島県尾道市美ノ郷町本郷 455-6

HARUMI WAVE GARDEN

建築主：株式会社みずほ銀行
主要用途：事務所・店舗・駐車場等
意匠設計：浅井 信雄・南川 大輔・藤田 倫也
構造設計：諸星 雅彦・廣羽 直樹
設備設計：佐藤 孝司・甲嶋 秀平
電気設計：尾澤 洋光
本体(コアシェル)設計・監理：株式会社三菱地所設計
敷地面積： 4,705.86 m²
建築面積： 2,565.90 m²
延床面積： 43,432.68 m²
構 造：S造・RC造(一部SRC造)
規 模：地上20階・地下2階・塔屋1階
竣工年：2024年
所在地：東京都中央区晴海三丁目4,5,6番地

ダイキンエアタワー

建築主：ダイキンエアタワー
主要用途：事務所
意匠設計：高橋 晃一・元木 智也・Bryan Reinhard・Tiffany Tommy
構造設計：中島 英己・Ny Muoy Guech
設備設計：坂東 卓
電気設計：松尾 昌一
基本設計：株式会社日建設計
申請コンサル：Vietnam Investment Consulting and Construction Design Joint Stock Company

敷地面積： 2,541.00 m²
建築面積： 1,260.00 m²
延床面積： 14,234.62 m²
構 造：RC造(一部プレストレストコンクリート構造)・一部S造
規 模：地上13階・地下3階
竣工年：2025年
所在地：10 Cong Truong Quac Te, Ward 6 District 3, Ho Chi Minh City, Vietnam

みなとみらい学園歯科クリニック

建築主：学校法人みなとみらい学園
主要用途：診療所
監 修：島山 亜紀
インテリアデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
グラフィックデザイン：原田 雄三・三澤 直也・谷 美由紀
照明デザイン：株式会社ライティング M
グラフィックデザイン：菅家 悠斗
敷地面積： 3,600.06 m²
建築面積： 1,957.09 m²
延床面積： 10,470.01 m²
構 造：S造
規 模：地上8階
竣工年：2024年(クリニック移転)
所在地：神奈川県横浜市西区高島1-2-15

新宿サブナード

建築主：新宿サブナード株式会社
主要用途：地下街・物販店舗・駐車場
意匠設計：ピーディーシステム 中村 光希・町田 睦・池上 千晶
構造設計：ピーディーシステム 大須賀 与志夫
設備設計：ピーディーシステム 山吉 崇
電気設計：ピーディーシステム 永澤 正宏
CG・パース：ピーディーシステム 小泉 えりか・田中 穂高
デザイン監修：フィールドフォー・デザインオフィス 大久保 敏之
敷地面積： ー
建築面積： ー
延床面積： 38,343.73 m²
構 造：RC造
規 模：地下2階
竣工年：2023年
所在地：東京都新宿区歌舞伎町1丁目2番2号



「紙って、本当に環境に良いの？」問いから始まった探求

紙の原料となる森林資源のこと、そして使用済みの紙がどのようにリサイクルされ、再び製品になるのか、その循環の仕組みを深く掘り下げました。紙について考えることは、単なる素材選びに留まらず、地球の森林資源、そして持続可能なリサイクル循環全体について考えることにつながる— DEW委員の興味や疑問から、自然発生的に「紙の勉強会」が立ち上がりました。

私たち設計者は、実際のプロジェクトにおいて、実に多くの素材を扱います。その一つ一つが、どこで生まれ、どのように加工され、そして最終的にどうなるのか。その背景にあるストーリーを知ることは、持続可能な社会を築く上で不可欠な視点です。

建設に関わる者として、自分たちにできることから日々行動することの大切さを改めて強く感じることができました。

身近なところから考える

サーキュラーエコノミー

紙のこと、資源のこと、地球のこと

stream DEW 2025

紙から考える持続可能な未来

今年のDEW冊子を手に取られた方は、その手触りに少し驚かれたかもしれません。実は、今年の表紙には古紙パルプを100%使用したリサイクル認証紙を、メインの紙には通常廃棄される米のもみ殻を紙の原料の一部として用いた混抄紙を採用しました。これは、DEW活動の一環として、紙の選択から見直した結果です。



このカタログの表紙は、古紙パルプ配合率100%の再生紙を使用しています。



このカタログは、環境に配慮したFSC®認証紙を使用しています。



このカタログの中頁は、対パルプ比1%以上のお米のもみ殻を再利用した混抄紙を使用しています。

発行日:2025年9月
編集・発行:清水建設株式会社 設計本部
〒104-8370 東京都中央区京橋2-16-1
Tel:03-3561-1111 (代)
編集事務局:設計本部 設計企画室
印刷:株式会社ビーディーステム
年1回発行予定【非売品】

